

第4節 岩宿時代の陥穴状土坑

1 岩宿時代の陥穴状土坑をめぐる発見と研究の経過

岩宿時代の土坑に关心がもたれたのは研究史のごく初期からであった。将来解きあかすべき当時の暮らし振りについて思いを巡らすとき、まず想起されたのはおそらく、岩宿時代人がどんな家に住み、何を食べ、どのように暖を取っていたのかといった、素朴でもっとも基本的なことがらについてであったろう。そして実際の発掘現場ではこのような疑問に直接答えてくれる住居址や炉といった、生活施設の発見に期待が寄せ続けられていたことであろう。1957年に刊行された日本最初の単行概説書『先史時代I 無土器時代』(芹沢 1957)では、はやくも竪穴住居址ではないかと思われる土層断面に注意が払われているし、1958年の荒屋遺跡の発掘では貯蔵穴かと考えられた土坑(芹沢 1959)、1962、64年の休場遺跡の調査では置き石炉も発見されている(杉原他 1965)。しかし、こうした期待感と成果に支えられつつも、その後続々と発見される遺構といえば、ほとんどの場合、礫群に限られていたといって過言ではない。

一方、石器に関する資料的蓄積と編年、技術、型式学的研究は目ざましい進展を遂げ、これとともに学界の关心は石器そのものへと収斂していった。そして岩宿発見後約20年、大規模発掘の時代が訪れ、眼前に累々と広がる礫群や石器ブロックを前にして、ふたたび集落としての遺跡、遺構に关心を向けざるをえなくなった。この時点でおそらく、住居、炉といった集落を構成するであろう基本的要素の発見に、ふたたび大きな期待が寄せられはじめたように思われる。少なくとも筆者にはこのような集落構成要素の一つとして、またそこで暮らした人々の生計や食料の問題と関連して、土坑が意識されるところとなつた。

1978年の磐田市寺谷遺跡の発掘調査で、2基の大型で深い土坑が発見された(鈴木 1980)。そこでは一つの世帯を表すと考えた石器ブロック、礫群、配石からなる諸要素の複合としてのユニットが二つ認められ、それに対応するかのように近接して、2基の土坑が発見された。土坑中に岩宿時代の遺物を含むうえに、層位的にも石器群と同時期と考えられることから、二つの世帯ユニットの構成要素として理解した。集落、世帯に貯蔵穴を伴う移動的集落設営と生業形態を想定してみようとしたわけである。その判断の要点をまとめなおしておくと、以下のようなことになろう。

1. 考古学的な発掘、遺構の検出法からは、石器ブロック、礫群、配石、土坑は同時存在と判断された。多数の土坑内遺物の出土もその例証となる。
2. 集落内で石器ブロック、礫群、配石と共に伴する以上、土坑は罠とは考えられない。
3. 石器ブロック、礫群、配石との位置関係は、いかにも同一集落内の生活施設の配列状況を想起させる。
4. 土坑は深く、埋葬品もないことから、墓とは考えにくい。

しばらく後、同じ磐田原台地の広野北遺跡でも多数の土坑を検出した(山下 1985)。この時点では若干の炭化したクルミの殻片を発見し、おそらく日本最初の植物質食料を遺跡内で発見することができた。しかし、それはまだ貯蔵穴説を証明するものではなかったし、また食すべくして蓄えた貯蔵食料の検出がかなえられなかつたことは、発見初期の少数例の中ではむしろ当然であり、この問題の帰結にはもう少し時間を要すると判断した。

このころすでに貯蔵穴説に対する的確な批判(石川 1982)はあったが、寺谷での発想に決定的な疑念

を懐かせたのは、初音ヶ原の土坑群の発見であった（前嶋他 1989、前嶋 1989、三島市教育委員会 1989）。それはつぎの二つの理由からであった。第1は、我々が直接関係した土坑が、いわゆる遺跡（集落）内にあって石器ブロック、礫群、配石と近接して、一つの集落空間を構成しているかのようなかたちで検出され、そのように理解したのに対し、初音ヶ原では付近に石器ブロックや礫群などは見当たらず、土坑群は明らかに遺跡（集落）外的場に位置していたこと。第2はその配列性である。1本の線上に連なり、あたかも弧を描き、台地を横断しあるいは取り囲むかのように配列され、また土坑間の距離もほぼ一定の間隔を保っていたこと。

この2点によって、筆者は貯蔵穴説に根本的な疑念を懐くようになった。そう思いかえしてみると、広野北遺跡においても線状に連なる配列性は、初音ヶ原と類似していることにもあらためて思い至る。発見当初からこの点は意識していたが、たまたま土坑群は遺跡が位置する南北に長い微高地の一番高い位置を占めていたこともある、発掘当時我々は、これが貯蔵穴のもつ機能的要請による占地のあり方ではなかろうかと理解した。

いずれにしろ、初音ヶ原の例をきっかけとして、群馬県勝保沢中ノ山、神奈川県長井台地などの新出例も念頭に置きつつ、認定法の問題は別にして、寺谷や勝保沢中ノ山のように同時期、同一平面と判断される状況で、石器ブロックや礫群、配石などと近接して確認されるような例はいまだ検討を要するしつつも、貯蔵穴説を撤回する一文を書いた（鈴木 1993）。その後に焼場、下原、加茂ノ洞B遺跡など三島市内で類例の発見が相次ぎ、また磐田原台地でもつい最近になって、匂坂中下IV、高見丘III・IV遺跡で、類例の発見が報じられることになった。土坑をめぐる資料環境はあらたな局面を迎えることになった。

ところで土坑を含む住居址、炉址といった集落内生活施設の遺跡におけるあり方、発見の状況はどのようなものであつただろうか。発掘者によって住居址と称せられた遺構の検出例は、おそらく20例に近いであろう。しかしながら本当に住居址と解釈されるものは、皆無かほとんどないに等しいのではないか。もしこの中にいくつかでも竪穴住居例を含むとしても、おそらく1,000をかぞえるであろう、岩宿時代文化層の発掘件数からみれば、これらがいかに例外的な存在であり、この特例をもって一般化できるものではないことは否定しようもない事実であるといつてよい。

では炉址の方はどうであろうか。研究史の初期に発見された休場以降、なかなか類例の追加は果たされなかつたが、それでも石塊を配した炉址の検出例が少しずつ増えてきている。住居の発見例に比較して確実な例は多いにしろ、それでも20例に満たないであろうし、石を周りに置かない地床炉の例は皆無にちかい。ここでも炉址などの遺構の残される例やその状況をもって、当時の集落の一般像を描くことの難しさを教えているかのようである。

こうした現実を踏まえて、住居址や炉址をとどめた集落遺跡の発見や、検出遺構によって集落の復元を目指そうという期待は将来も果たされることはなく、集落の研究は結局ブロックに始まりブロックに帰らなければならないと自分に言い聞かせざるをえなくなった（鈴木 1995）。

今後の集落研究にとって用いうる材料は、生活施設としての遺構の側では礫群・配石のみであり、これに加えてブロックの解析にすべてがかかっていることをあらためて認識しているような次第である。

土坑を集落遺跡の構成要素として捉えてきた経過の中では、上記のような帰結を得たわけであるが、いまここであらためて問題の土坑を見直すために、これを陥穴と考える立場から再出発するとすると、これをどのような視点で捉え直せばよいのであろうか。言い換えれば、当時の狩猟形態、生業体系、移動生活を前提にした集落の設営様式との関連でどう位置づけるのかという点に、思いを巡らしつつ進まなければならないということになろう。その意味で近年、三島市内を中心として増加の著しい陥穴状土坑の発見は、今後に向けて非常に重要な問題を投げかけているとすべきであろう。

しかしながら、この種の土坑の発見はその緒についたばかりであり、ここ数年の状況をみれば、今後

ますます類例は増加するにちがいない。今のところ三島市内と磐田原台地に集中しているが、このことはこれらの資料の語る現実が、静岡県下を中心とする限定された地域の特殊事情を反映している可能性と、これとは反対に今後の発掘調査の進展によっては類例の発見が日本全土に拡大し、資料の現状を大きく変えるかもしれないという二つの可能性がある。この二つの可能性のどちらが有利な情勢にあるのかは、いま軽々に判断すべきではないであろう。

ただ参考までに土坑の発見状況を調査規模との関係で紹介しておくと、磐田原台地で1993年まで発掘調査された勾坂中遺跡は面積80,000m²を有するが、土坑の検出はなかった。反対に寺谷遺跡の面積は1,000m²ほどにすぎない。このことは発見の有無がかならずしも調査地の面積によっているのではなく、ある条件によっており、有るところにはあり、無いところにはないということを示しているようである。事情は三島市内でも同様であり、いまは資料の集積過程にあるとはいえ、静岡県下のあるいは箱根西南麓や磐田原台地という特殊な背景が関与している可能性も一応意識しておかなければならないのではなかろうか。

以上のように理解したうえで、土坑そのものの構造、時空分布、立地などの資料的現実の把握と整理を第一にこころがけ、これにくわえて問題の二三についても思いつくままに筆を運んでいくことにしたい。

(鈴木)

〈参考文献〉

- 石川治夫 1982 「子ノ神」(『子ノ神・大谷津・山崎Ⅱ・丸尾Ⅱ』、沼津市教育委員会)。
- 杉原莊介・小野真一 1965 「静岡県休場遺跡における細石器文化」(『考古学集刊』第3巻第2号)。
- 鈴木忠司編 1980 『寺谷遺跡』(磐田市教育委員会)。
- 鈴木忠司 1993 「貯蔵穴」(『考古学の世界2 関東・中部』、ぎょうせい)。
- 鈴木忠司 1995 「岩宿時代のイエとムラ」(『岩宿時代を知る』、群馬県笠懸町教育委員会)。
- 芹沢長介 1957 『先史時代I 無土器時代』(日本評論新社)。
- 芹沢長介 1959 「新潟県荒屋遺跡における細石刃文化と荒屋型彫刻刀について(予報)」(『第四紀研究』第1巻第5号)。
- 前嶋秀張・鈴木敏中 1989 『初音ヶ原遺跡群Ⅲ』(三島市教育委員会)。
- 前嶋秀張 1989 『初音ヶ原遺跡出土の土坑について』(『静岡県考古学研究』20)。
- 三島市教育委員会 1989 「陥穴状遺構の発見」(『静岡県の現像を探る』、静岡県教育委員会)。
- 山下秀樹編 1985 『広野北遺跡』(磐田郡豊田町教育委員会)。

2 陥穴状土坑発見遺跡

第1節で記載された静岡県下の岩宿時代の土坑検出遺跡は12遺跡、土坑数102基である（表22）。静岡以外では、16遺跡、約40基となる。縄文草創期2遺跡も含め、ここでは静岡県下以外の発見例を北から順に記載して資料提示をしておく。

表22 岩宿時代陥穴状土坑検出遺跡地名表（文献は145頁参照）

NO.	時期	層 準	基数	遺 跡 名	所 在 地	標 高	立 地	文 献
宮城県	1	I～草	AT上	4 青葉山E	仙台市	155m	丘陵性台地	1
	2	I～草	AT上	1 支倉	柴田郡川崎町	205m	丘陵	2
	3	J	-	1 中峰C	黒川郡大和町	90m	丘陵性台地	3
群馬県	4	I	AT下	2 勝保沢中ノ山	勢多郡赤城村	360m	丘陵性台地	4
埼玉県	5	I	AT上	1 大山	北足立郡伊奈町	15m	台地	5
千葉県	6	J	-	6 木の根	成田市	40m	台地	6
東京都	7	I	AT上	1 ICU Loc.15	小金井市	60m	台地	7
	8	I	AT上（前後）	1 四葉	板橋区	30m	台地	8
	9	I	AT上	1 菅原神社台地上	板橋区	28m	台地	9
	10	I	AT上	1 鈴木	小平市	70m	台地	10
神奈川県	11	I	AT上/下	3 長井台地	横須賀市	30m	台地	11
福岡県	12	I	AT上？	1 椎の木山	北九州市	25m	丘陵	12
長崎県	13	I?	AT上？	1 牟田の原	平戸市	97m	丘陵性台地	13
宮崎県	14	I	AT上	2 垂水第1	宮崎市	95m	台地	14
	15	I	AT上	2 南学原第2	宮崎郡佐土原町	79m	台地	15
鹿児島県	16	M	AT上	16 仁田尾	日置郡松本町	190m	台地	16
	17	M	AT上	1 大久保	出水市	500m	丘陵性台地	17
	18	M	AT上	2 鹿村ヶ迫	薩摩郡	110m	台地	18
静岡県	19	I	AT上	1 久根ヶ崎	田方郡亘山西町	15m	低位段丘	19
	20	I	AT下	29 初音ヶ原	三島市	97m	丘陵	20
	21	I	AT下	7 下原	三島市	125m	丘陵	21
	J	-	4	下原（上層）	三島市	125m	丘陵	21
	22	I	AT下	2 焼場A地点	三島市	125m	丘陵	22
	23	I	AT下	17 加茂ノ洞B	三島市	150m	丘陵	23
	24	I	AT下	7 八田原	三島市	140m	丘陵	24
	25	I	AT上	4 子ノ神	沼津市	65m	丘陵	25
	26	I	AT上	4 柏葉尾	沼津市	68m	丘陵	26
	27	I	AT上	2 寺谷	磐田市	92m	台地	27
	28	I	AT上	2 勾坂中下4	磐田市	73m	台地	28
	29	I	AT上	10 高見丘III・IV	磐田郡豊田町	52m	台地	29
	30	I	AT上	17 広野北	磐田郡豊田町	45m	台地	30

I : 岩宿時代 J : 縄文時代 M : 細石刃石器群

(1) 宮城県青葉山遺跡E地点

旧仙台藩青葉城址、現東北大学構内にある。標高は約15m。一帯は青葉山丘陵とよばれる比較的平坦な台地が広く展開するが、これは遺跡の北側約500mを東流する、広瀬川の高位段丘に相当する。台地には樹枝状にのびた幾筋もの谷が発達し、台地を掌状に画している。段丘面は開析がすすみ、台地の景観は丘陵状を呈する。遺跡はこのような尾根状にのびた台地の一角を占めている。遺跡の立地する地点のすぐ北、西側には、東北方向に開口して広瀬川に通じる解析谷がある（第86図）。

4基の土坑が発見されており、台地平坦部から谷にかかる肩部を占めるように分布している。土坑の長軸方向は台地の走向にほぼ並行する。これに対して、一列に連なった土坑の配列の方向は、緩い弧を描きながらこれにほぼ直行している（第87図、ただし、地形図は7層上面と合成）。土坑間の間隔は、約4.5～7.5mを測るが、第1、2、3土坑間は約4.5mと均等で、第1、4号間が約7.5mと広い（第88図）。

土坑の平面形は隅丸長方形および長楕円形を呈する。横断面の形は2、3号土坑では下底面の掘方が

明瞭で底の平らな深鉢状を呈するのに対し、4号土坑はU字形の下底面をもち、丸底鉢形を呈する（第89、90図）。土坑の大きさは1～3号が長さ120cm前後、幅60cm前後、深さ約100cmであり、4号土坑は長さがこれらとほぼ同じであるのに対して、幅はやや狭く、深さは浅い。土坑の法量の詳細は第23表に掲げたとおりであるが、検出面と掘り込み面との差を考えれば、50cm前後は深く見積もる必要があろう。

上記のように、配列の方向、土坑間の距離、土坑の平面・断面形態、深さなどの差に注目すれば、あるいは1～3号および4号の2群に分かれるのかもしれない。

出土遺物は3号土坑中出土のチップ1点のみであり、これ以外には土坑と同時代の遺物は、約30×20mの調査区内では発見されていない。なお、東方約150mのF地点、東方約200mのB地点で、ややまとまつた後期岩宿時代の石器の出土がある。

土坑の検出面は5、6a層上面であり、本来の掘り込み面は2層上面ないし3層上面と推定されている。土坑の所属年代は層位的所見から後期岩宿（旧石器）時代から縄文草創期（晚期旧石器）とされている。

表23 青葉山遺跡土坑計測表

土坑番号	開口部(cm)		底部(cm)		深さ(cm)	長軸方向
	長	幅	長	幅		
1	108	56	80	17	31	N53° E
2	127	71	107	32	94	N46° E
3	126	68	104	30	99	N65° E
4	130(推定)	48	110(推定)	19	48	N78° E

（2）宮城県支倉遺跡

宮城県南西部、仙台南郊にあたり、柴田郡川崎町に所在する。遺跡一帯は青葉山丘陵につらなる丘陵の一角にある。遺跡は南側の丘陵から延びるゆるやかな丘陵斜面上に位置する（第91図）。標高約205m。

遺跡はA、B、Cの3地区からなるが、問題の土坑はB地区から単独で検出された。B地区は幅30mほどの舌状の丘陵部にあたる。土坑は1基で、検出位置は丘陵中央平坦部から斜面部にかかる地形変換点付近にある（第92図）。土坑の長軸の方向は丘陵の走向とほぼ直行する（第93図）。

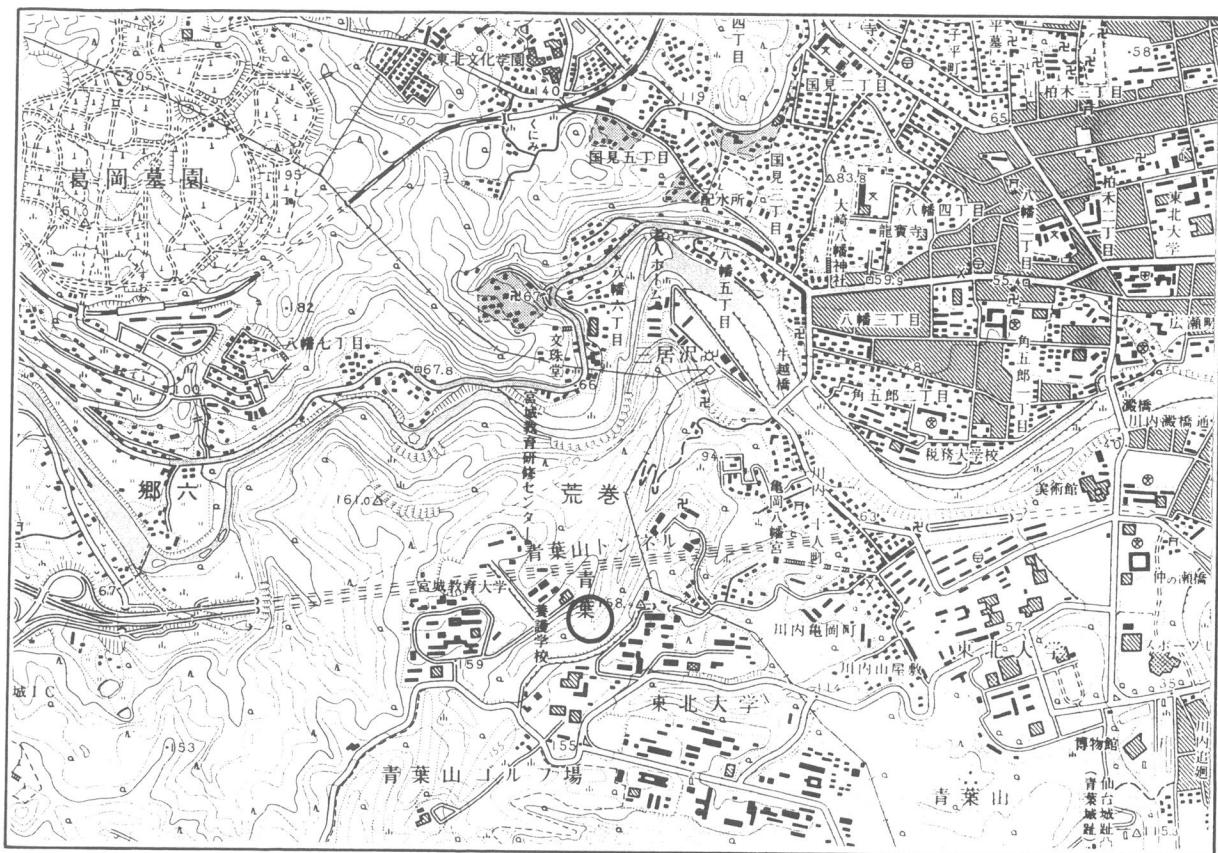
土坑の平面形は、長楕円形を呈し、断面形は底が平らな深鉢形をなす。大きさは、長さ115cm、幅55cm、深さ80cmを測る。

土坑の確認面は12層上面であり、掘り込み面は9層（黄褐色ローム）上面から12層上面のいずれかにある。

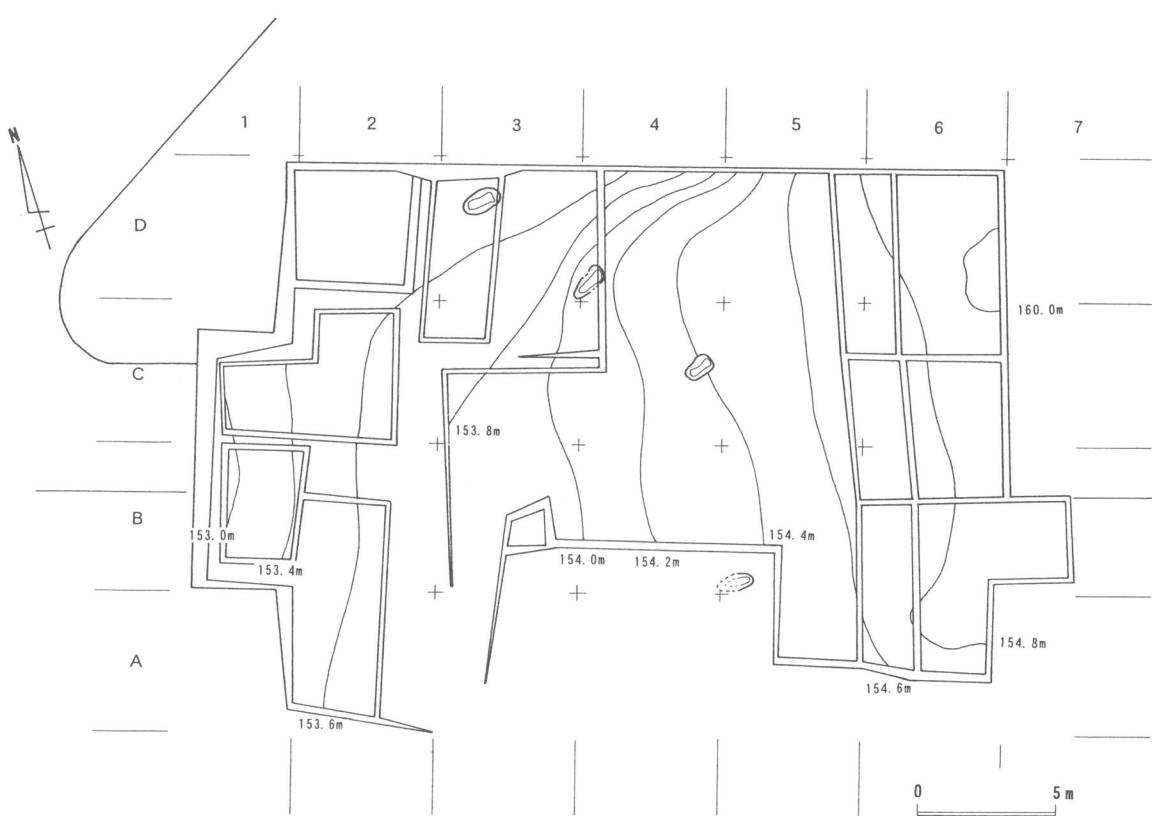
土坑の検出、掘り込み面層準および土坑内での遺物分布はない。ただし、発掘調査は丘陵中央部に設けられた、6m間隔、幅3mのトレンチ調査によるものである。

土坑の時期は、14層が川崎スコリア層であるので、30,000年B.P.以降の後期岩宿時代のいずれかの時期である。あるいは明示されていないが報告記載にいう旧石器時代とは、晚期旧石器を含み、縄文時代草創期の可能性もあるのかもしれない。

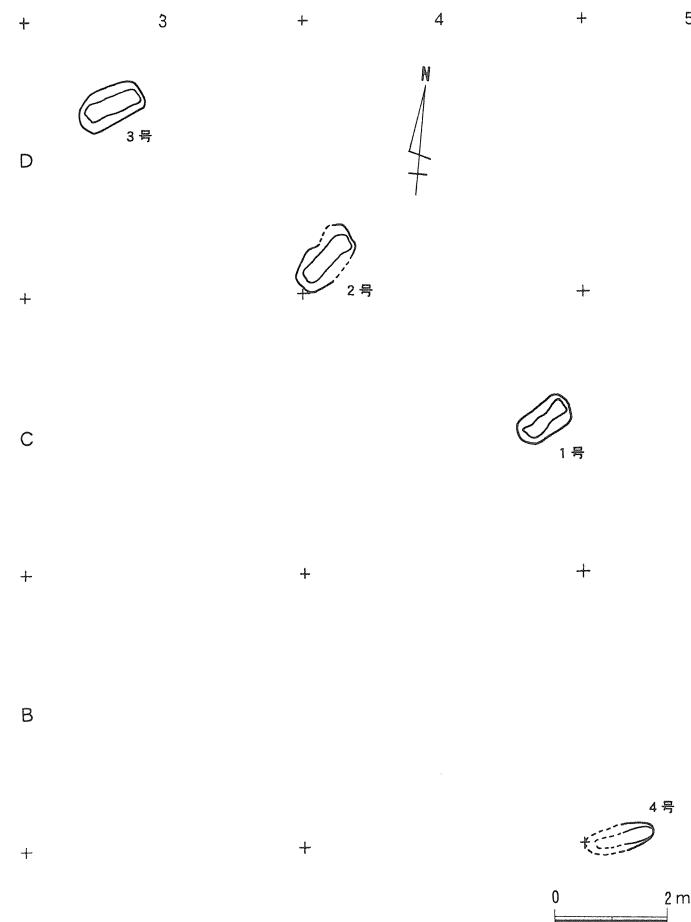
なお、A、C地区それぞれ11、2基の陥穴状土坑が検出されている。ただし、これらの土坑は例外なく3層黒褐色土層から掘りこまれており、B地区検出例とは明らかに時期を異にし、形態も相違するという。



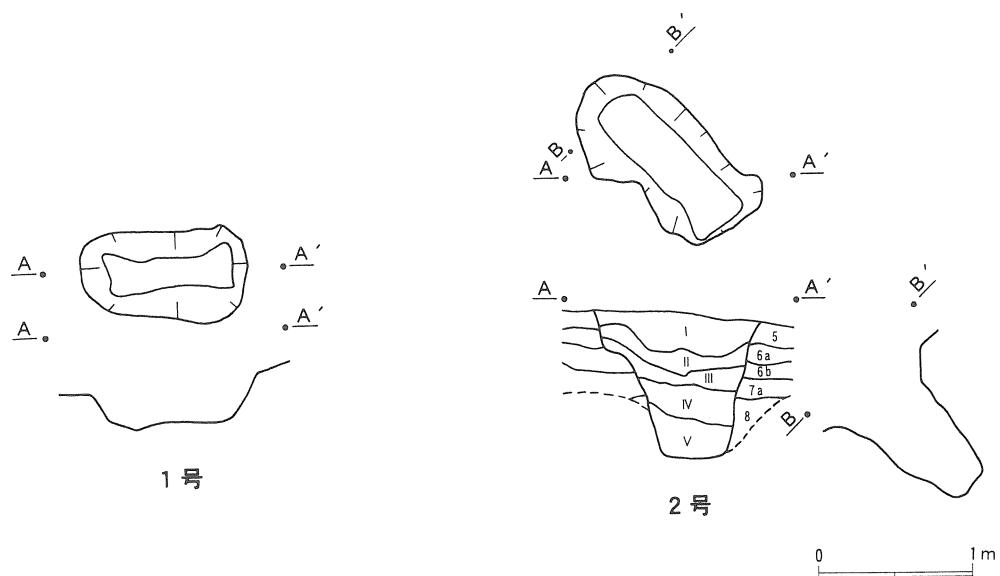
第86図 青葉山遺跡E地点と周辺の地形 (1/25,000 仙台西北部)



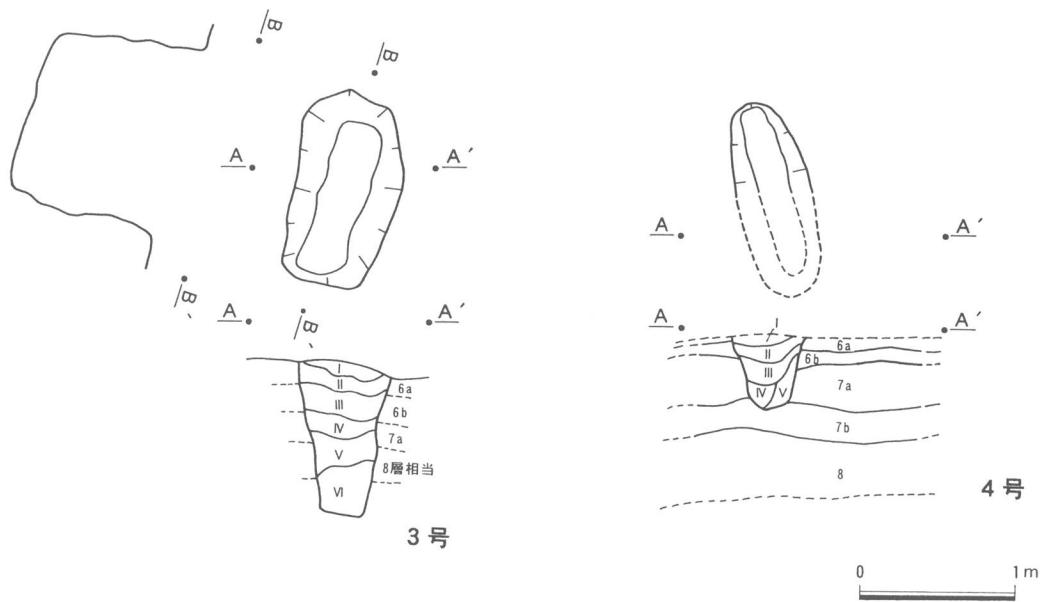
第87図 青葉山遺跡土坑位置図（等高線は7 b層上面）



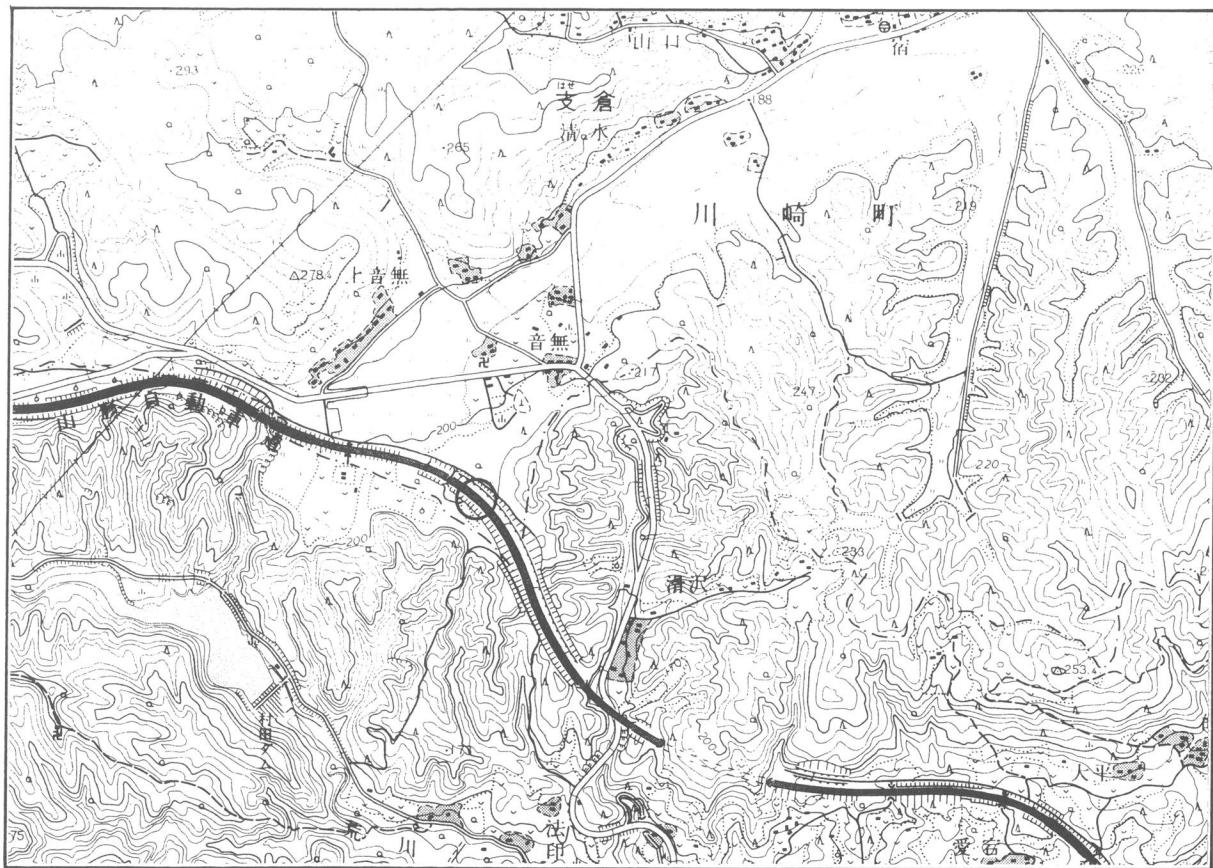
第88図 青葉山遺跡土坑配置図



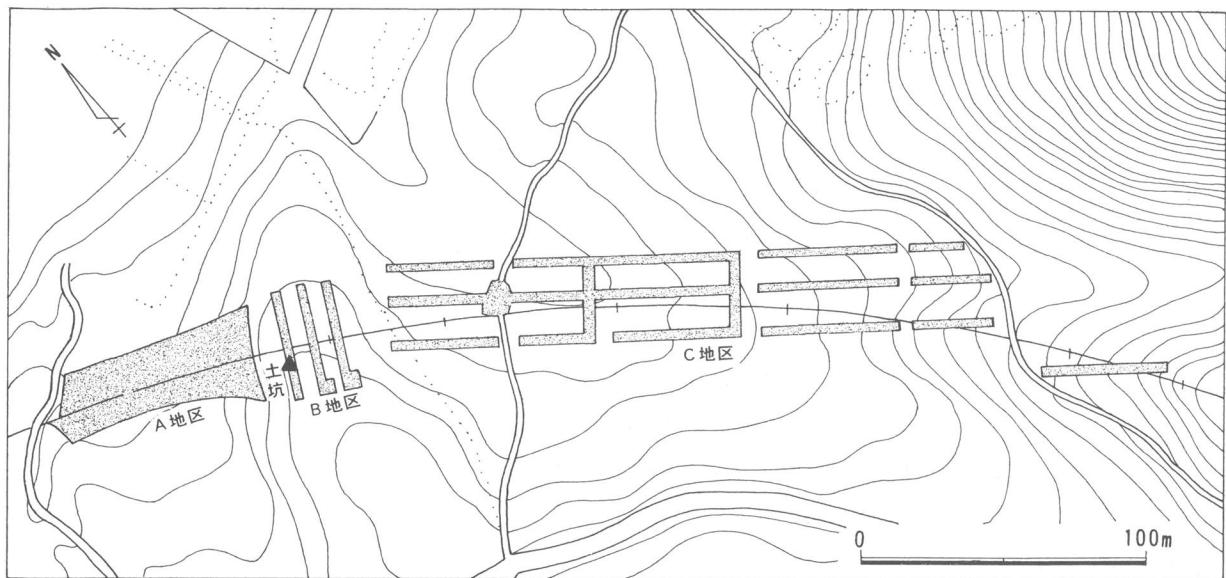
第89図 青葉山遺跡土坑実測図(1) (1/50)



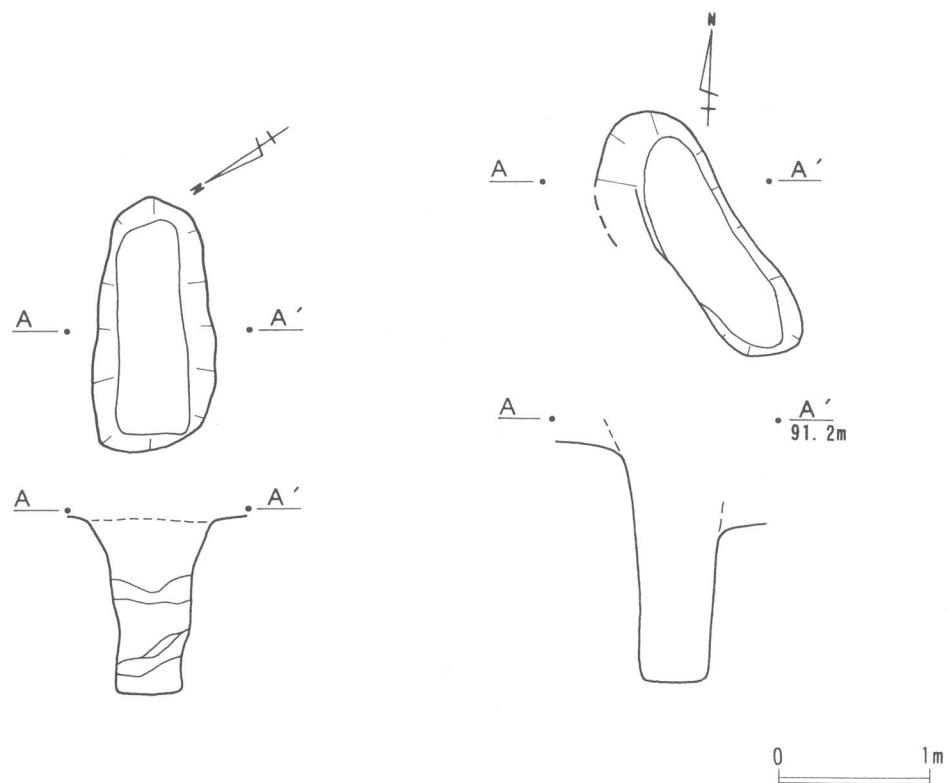
第90図 青葉山遺跡土坑実測図(2) (1/50)



第91図 支倉遺跡と周辺の地形 (1/25,000 村田)



第92図 支倉遺跡土坑位置図 (B地区 ▲印)



第93図 支倉遺跡（左），中峯C遺跡（右）土坑実測図 (1/50)

(3) 宮城県中峯C遺跡

宮城県中央部、仙台市北方約20kmの位置にある。一帯には起伏にとむ丘陵性の台地がひろがる。遺跡周辺は開析が進み、平坦部のすくない尾根状の地形を呈するが、台地南縁を東流する吉田川によって形成された高位段丘であるという。開析のすんだ丘陵状の高位段丘上に位置するという点で、青葉山遺跡と類似した地形景観の中にある（第94図）。

陥穴状土坑1基（第101号）が検出されたこの遺跡も、丘陵状台地の頂部平坦地を占めている（第95図）。標高約90m。遺跡のる台地と遺跡の範囲、遺跡の範囲と調査区との関係などが明示されていないので定かではないが、土坑の検出位置は東西45×南北30mにおよぶ調査区内の西端にあたるので、丘陵中央部をややはざれた斜面寄りの位置に設けられていたのであろうか（第96図）。

土坑の長軸の方向は、ほぼ丘陵の走向と平行する。

土坑の平面形は長楕円形を呈し、横断面は底が平らな深鉢形を呈する。大きさは、長さ130cm、幅約50cm、深さ110cmである（第93図）。

土坑の確認面はⅡc層上面で、掘り込み面はⅡa層中と推定されている。

土坑内に遺物はなく、Ⅱa層層準の遺物分布ははっきりしない。ただし、Ⅱb層上面では5ヵ所の石器集中があり、計62点、Ⅱc層上面では1ヵ所の石器集中107点の石器が出土している。さらにⅢ層上面、Ⅳ層上面、Ⅶ層にも文化層が認められる。

このうちⅢ層以下は前期岩宿（旧石器）時代に属し、Ⅱb層上面は後期旧石器時代終末、Ⅱc層上面は後期旧石器時代後半の時期に所属するという。したがって土坑の所属時期は、Ⅱb層の時期直前か、これ以降ということになる。

なおⅡc層上面では、調査区内の中央寄りの位置で、もう1ヵ所の土坑（第102号）が発見されている。しかし深さは10cmと浅く、平面形も先の土坑と大きく異なるので、ここでは検討を対象としていない（第96図）。

(4) 群馬県勝保沢中ノ山遺跡

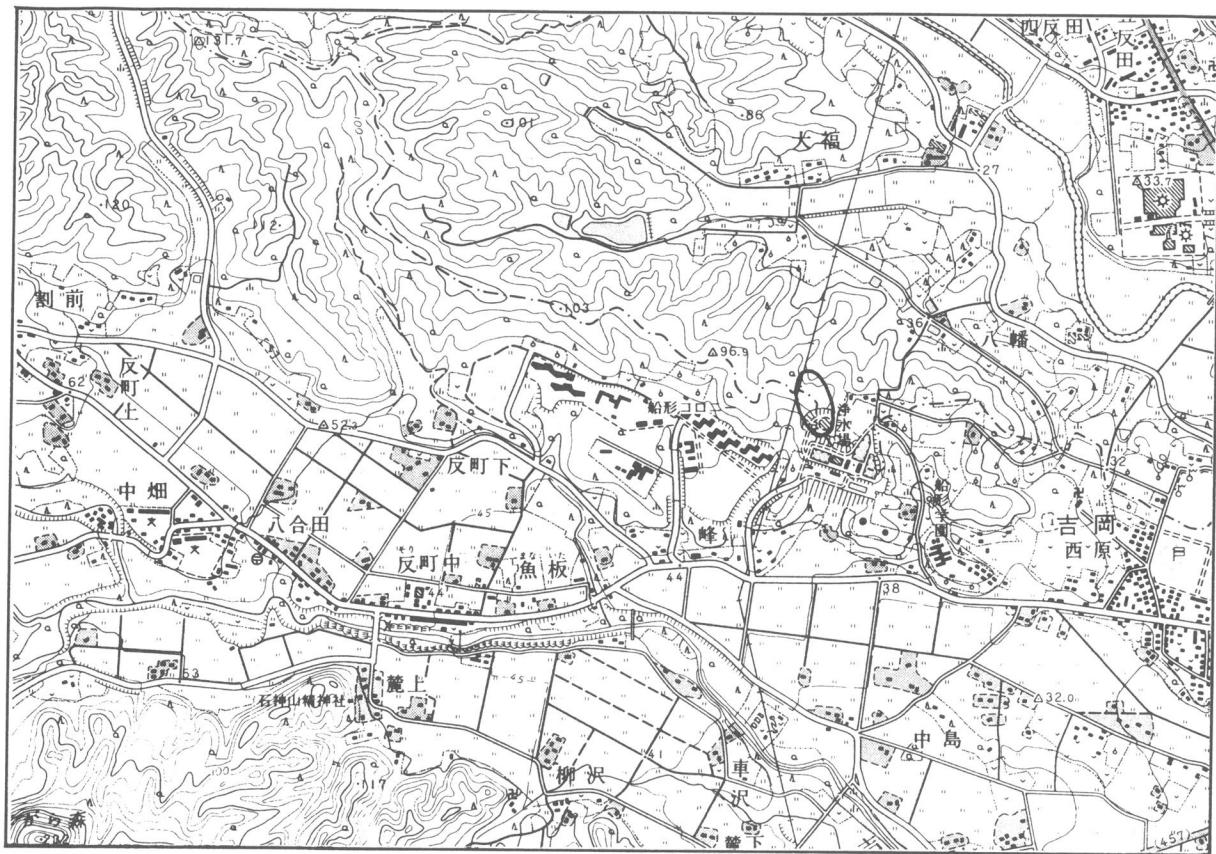
赤城山西麓に位置する。一帯は火山山麓の裾野地形がひろびろと展開している。山麓には無数の河谷が中腹から放射状にのび、裾野を細長く区切って丘陵地形を発達させていく。丘陵の末端は急崖となって利根川と接する。こうして赤城山麓には、側面と前面を深くえぐられた独立丘のような、長い尾根状の丘陵性台地が幾重にも並んでいる。遺跡はこうした丘陵の先端部近くに立地している（第97・98図）。標高360m。

A区から2基の陥穴状土坑が相接するように検出された。土坑は、幅約300mほどの台地平坦面の南端寄り、台地肩部付近に位置している（第99図）。

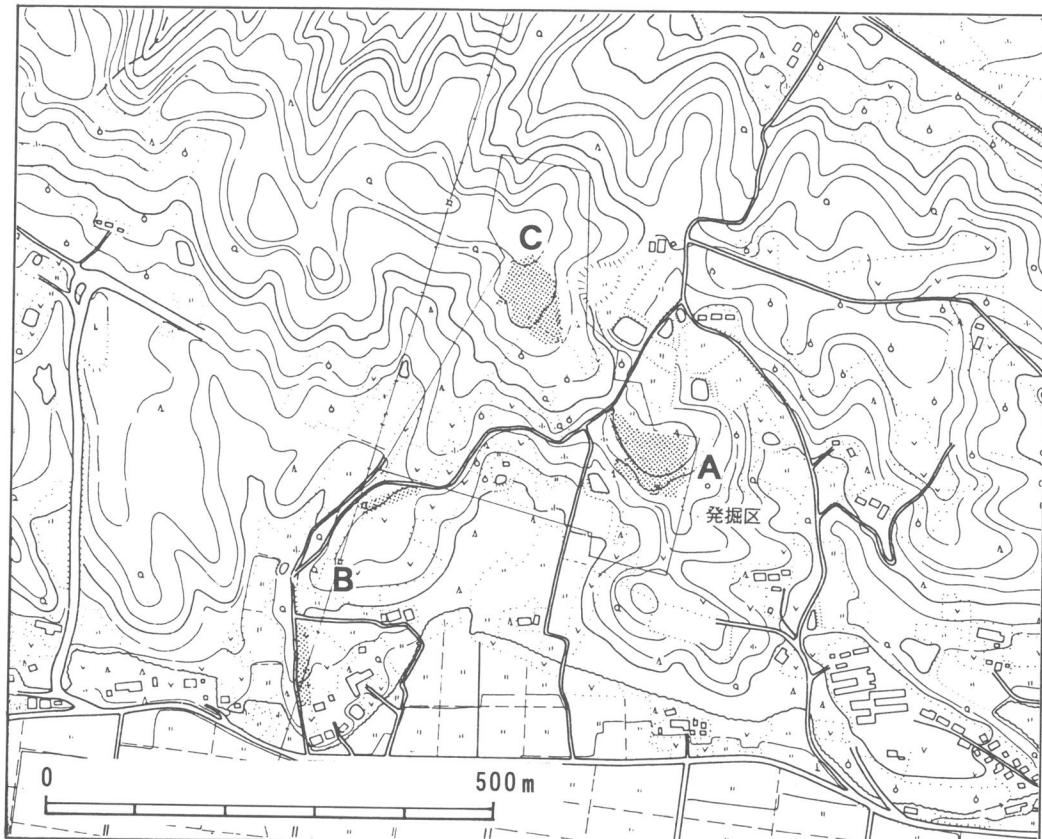
土坑の平面形はほぼ円形で断面形は下底部が丸くくぼみ、口の開いたU字形を呈する（漏斗形）。大きさは、それぞれ長径214cm、短径186cm、深さ144cm（2号）、長径260cm、短径186cm、深さ138cm（3号）をはかる。規模、プランともによく類似している（第101図）。

土坑の確認面はXVII層（八崎火山灰層）であり、二つとも覆土中に遺物はない。土層断面からは、土坑の掘り込み面がXV層以下XVI層中にあることがわかる。2基の土坑に切り合い関係があったか、同時併存して並んでいたのかははっきりしない。

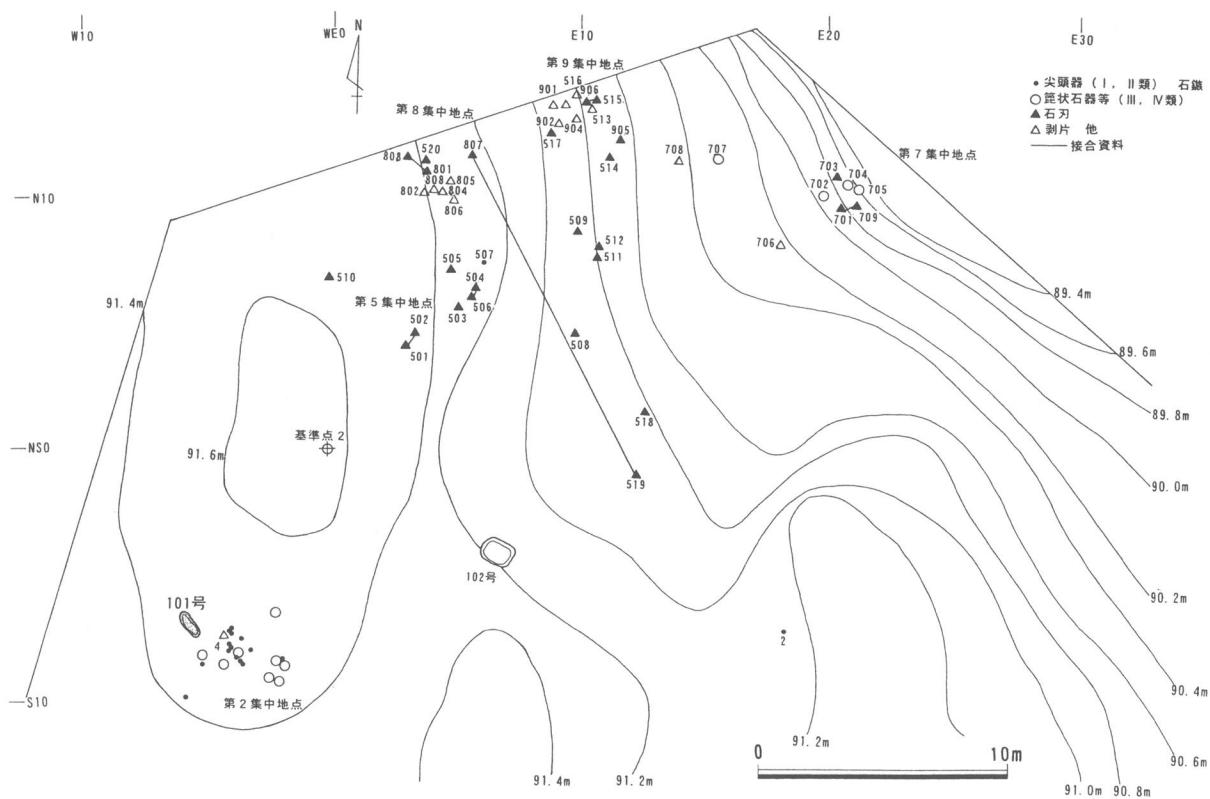
土坑の掘り込み面付近（XV～XVII層）を検出層準とする石器が多数検出されている。土坑の位置するA区ではおよそ60×40mほどの範囲で、3ヶ所のブロックを形成し、1,772点の石器が出土している。また北に50mほどの空白地帯を隔てて、B区では12ヶ所のブロックを含む、1,867点の石器が出土している。



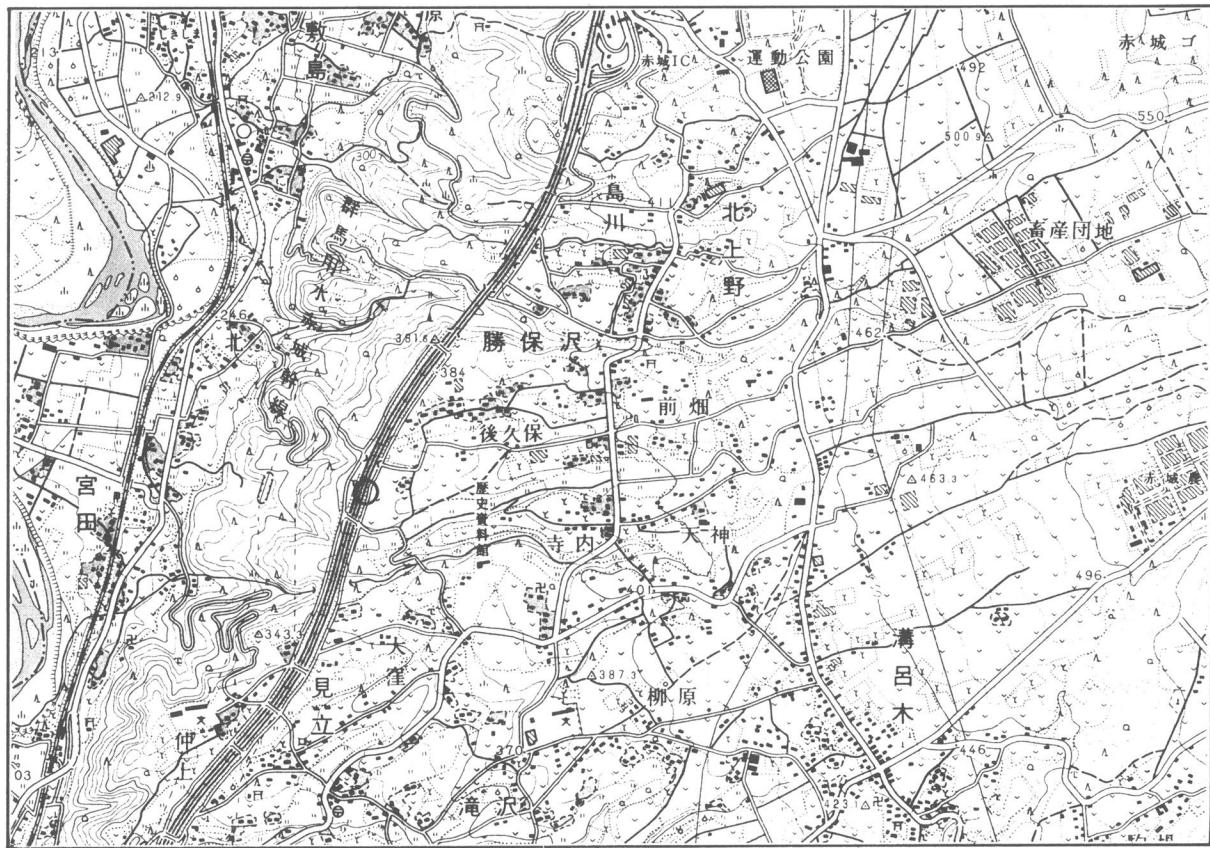
第94図 中峯C遺跡と周辺の地形 (1/25,000 七ツ森)



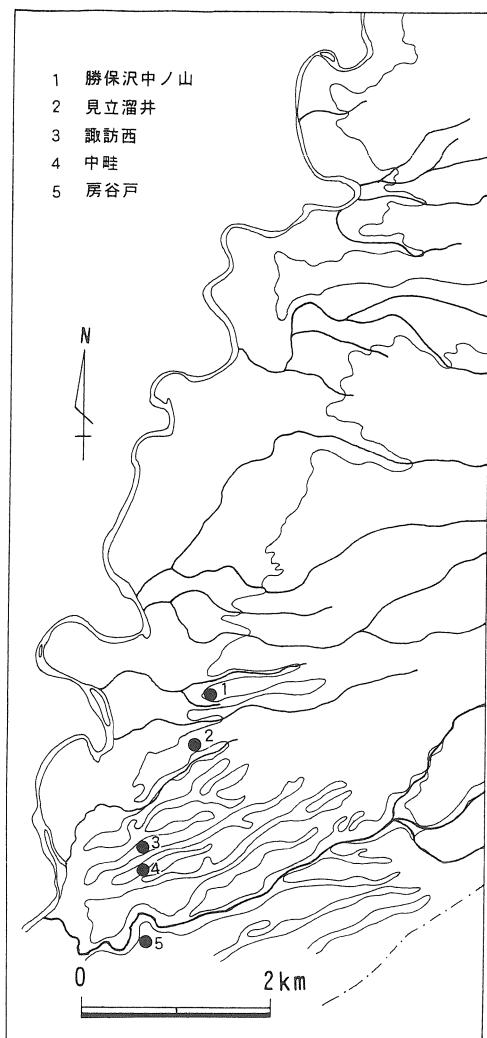
第95図 中峯C遺跡周辺の詳細地形



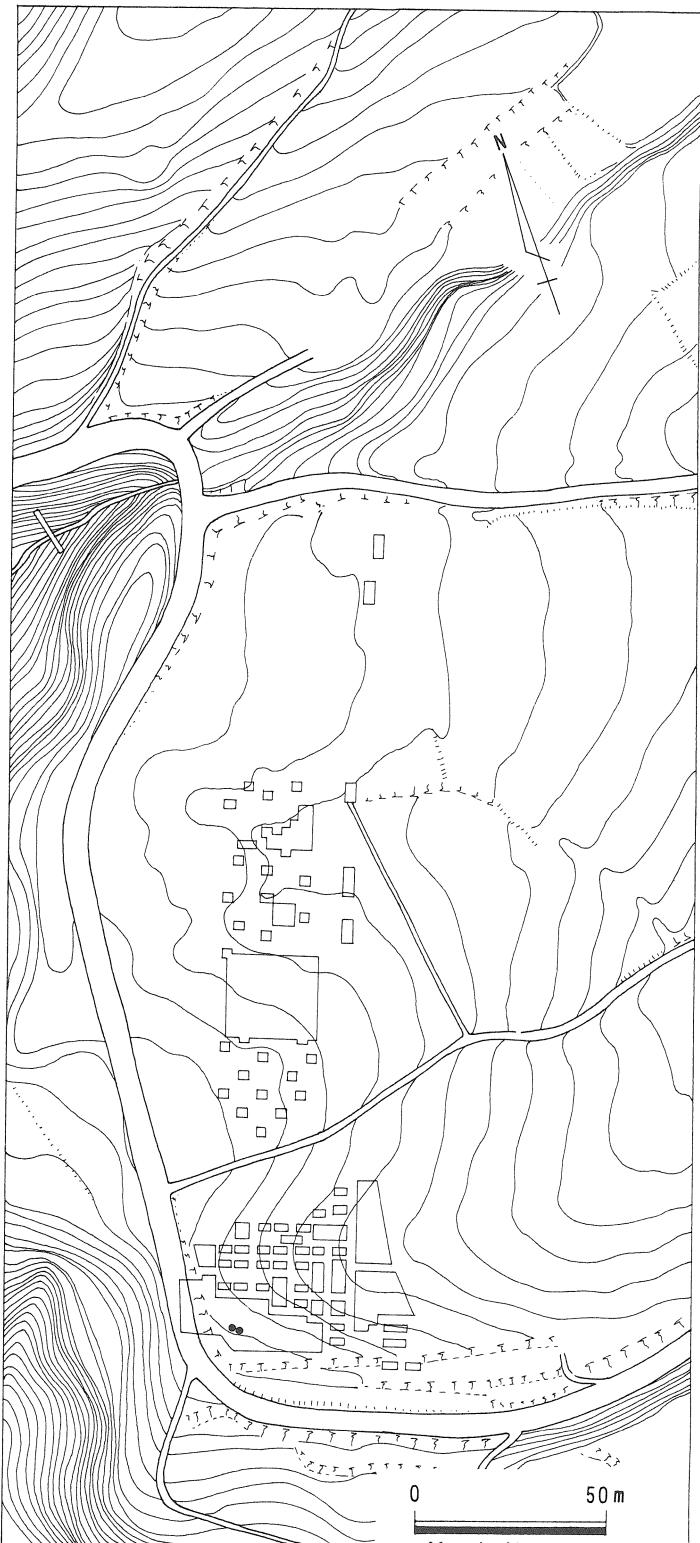
第96図 中峯C遺跡土坑位置図（網点）



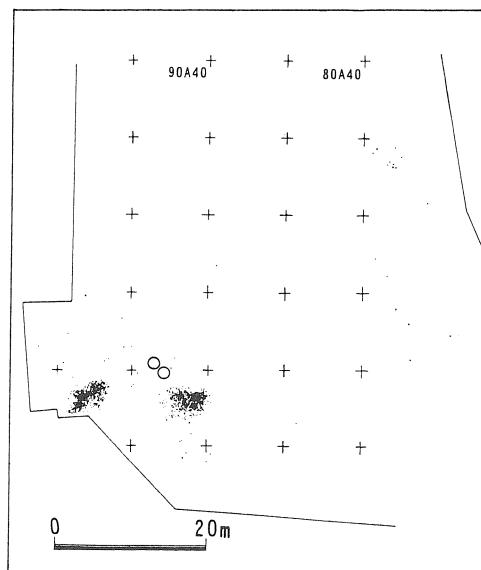
第97図 勝保沢中ノ山遺跡と周辺の地形 (1/25,000 鮎沢)

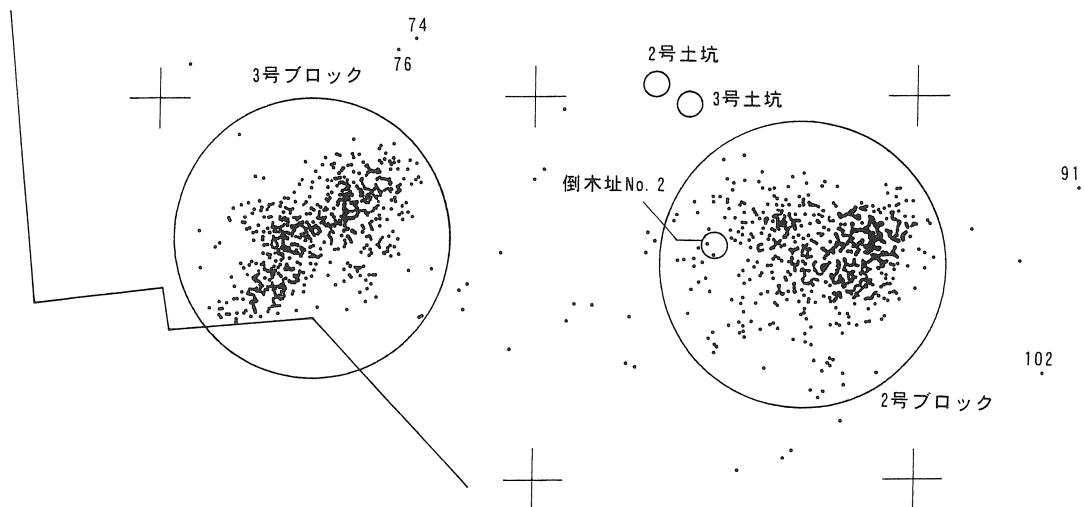


第98図 勝保沢中ノ山と周辺の遺跡

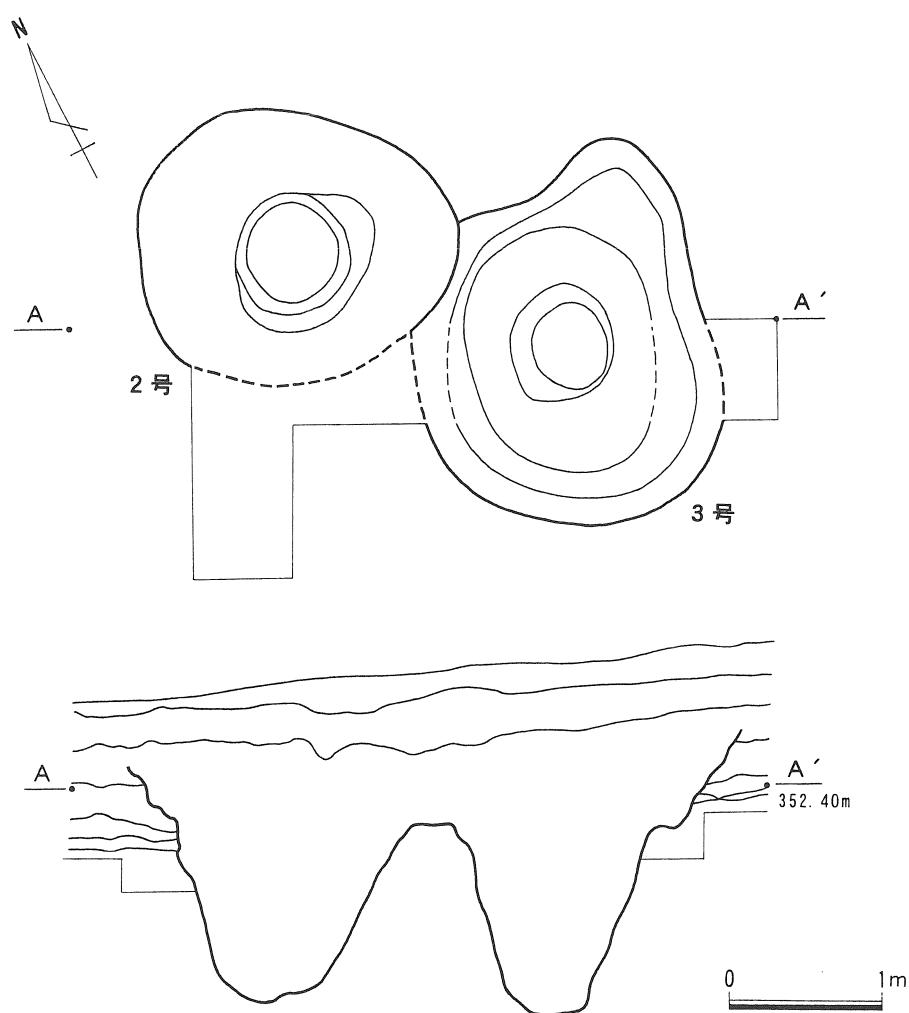


第99図 勝保沢中ノ山遺跡土坑位置図





第100図 勝保沢中ノ山遺跡土坑位置図



第101図 勝保沢中ノ山遺跡土坑実測図 (1/50)

B区石器群の方がA区石器群よりも編年的にやや古いとされているが、いずれにしろこれらの石器群は石器の検出層準の所見からすれば、土坑と同時期の可能性を一応考慮しておく必要があろう。

A区の土坑は約2mの距離をおいて、2号ブロックの外縁に接する位置にあり（第100図）、層位的発掘所見レベルでは、ブロックと土坑の同時存在の可能性を否定できない。ただし、両土坑ともブロックに近接しているながら、土坑覆土中に1点の石器も見いだされていないことは、両者の共存、共用関係にとってマイナス要素として注意しておくべきかもしれない。

土坑の所属時期はXV層上部にATの極大値が求められることや、石器群の特徴からAT下位の石器群の時期に属すると判断される。報告者はA区を「後田遺跡直前段階」、B区をA区以前で「分郷八崎遺跡以後」の段階としている。

（5）おおやま埼玉県大山遺跡

大宮台地の東北端にあたる小室支台上に位置し、一帯は平坦面がひろびろと展開している。遺跡は小室支台の西縁にあり、台地下4～5mを大宮台地の東縁を画する綾瀬川の支流が南流している（第102図）。標高15m。

土坑1基が確認されている。調査区内の西端近くを占める。ここは数mで台地の肩部にいたる（第104図）。

平面形は隅丸方形ないし不定型の円形をなす。大きさは、長径128cm、短径97cm、深さ40cmである。長軸の方向は台地縁辺の走向とほぼ平行する。土坑の確認面は黒色帶上面（暗褐色ローム）であったが、もっと上から掘り込まれたと考えられ、深さは現状より20～30cmほど深かったと推測されている。土坑内に遺物はなく、覆土はソフトロームで満たされていた（第103図）。

土坑の付近で、ナイフ形石器2点を含む23点の石器群からなる、直径3mほどのブロックがあり、ブロック外縁が土坑に接するような位置関係をしめている。石器の出土層準はハードロームを中心にソフトローム下部から暗黄褐色ロームにかけて出土した。

土坑の推定掘り込み面の層準および石器出土層準、ローム層中の遺構、遺物が他に発見されていないことなどの発掘所見から、至近の距離に分布する土坑とブロックの時期は、別個のものとして扱いうる材料はなく、両者は同一時期の可能性が考えられている。AT上位（ハードローム層あたりか）に両者の所属時期があると考えられる。

ただし、ブロックに近接して存在する土坑内に石器の出土がないことは、両者の共用、共伴関係にあつたことへの消極的材料とみるべきかもしれない。

（6）千葉県木の根（空港No.6）遺跡

千葉県北半部を占める下総台地の真っ只中にある。一帯は広大な平坦面がどこまでもひろがっている。台地内には樹枝状に谷が網の目のように発達して台地を開析し、無数の舌状の小台地を形成している。

遺跡付近は利根川水系と太平洋水系との分水界にあたり、平坦面をもっとも広く残している。こうした地域の一角で、東、西、北側を台地深く入った谷によって画された舌状台地上が、木の根（空港No.6）遺跡である（第105図）。南から突き出すような台地の幅は、およそ500mを測る。この台地はさらに2本の小谷によって3分されるが、ここでとりあげる陥穴状土坑は、一番西の舌状張出部（A地点）から検出されたものである（第106図）。標高40m。

A地点は幅100mほどの平坦面を有するが、報告者が約12,000年B.P.という年代を引いている一群は、台地の前面（北側）谷寄りで、10mほどで崖に達するような位置に集中分布している。土坑群間の間隔や配置関係に特別な関係や単位性は窺えないようである。ほぼ円形の土坑であって、長軸方向を問題に

することにあまり意味はないかもしれないが、規則性がはっきりみられるとはいえない。

遺跡全体で31基検出された土坑は、A～Fの6類型で区分されている。各類型を簡単に紹介しておくと次のようになる。

A類：小型。開口部は円形、底面は橢円形を呈し、長軸/短軸比はおよそ1:0.75をなす。底部付近で広くなつて、断面糸巻形を呈する。6例。

B類：長軸/短軸比がA類に近いが、規模が大きいもの。1例。

C類：深さ2.4m以上の深いもののうち、長軸/短軸比が1:1.36ほどで、土坑底部が長橢円を呈するもの。6例。

D類：底面の幅が狭く、長橢円形ないし棒状を呈するもの。14例。

E類：底面が小型の隅丸方形を呈し、深さは70～90cm前後と浅い。3例。小ピットの認められるもの1例がある。

F類：底面が細長い長方形で、深さ1mほどの浅いもの。1例。

これらのうちA類に属するのは、2、4、5、6、7、8号の6例であり、このうち6号では、12,220±230B.P.、8号では12,870±410年B.P.という¹⁴C年代値が得られている。また覆土は、他の諸例のような腐食土の流入がまったくみられず、ローム類似土で満たされているという。年代測定値をそのまま信じれば、縄文草創期ということになろう。土坑の形態、規模は、第107、108図の実測図と第24表に譲るとして、参考までにあげたA類以外の2例（第108図16、24号土坑、ともにC類）は、深さを除けばかならずしも明瞭にA類と区分できるものばかりではないともいえる。土坑の類型区分と所属年代の問題は微妙な要素を含んでいるようにみうけられる。

土坑の検出面はⅢ層ソフトロームにあることが多い。A類の7、8号土坑は、ハードローム面まで下げてはじめて検出されたが、他の例もⅢ層面ではシミに近い状態であるという。

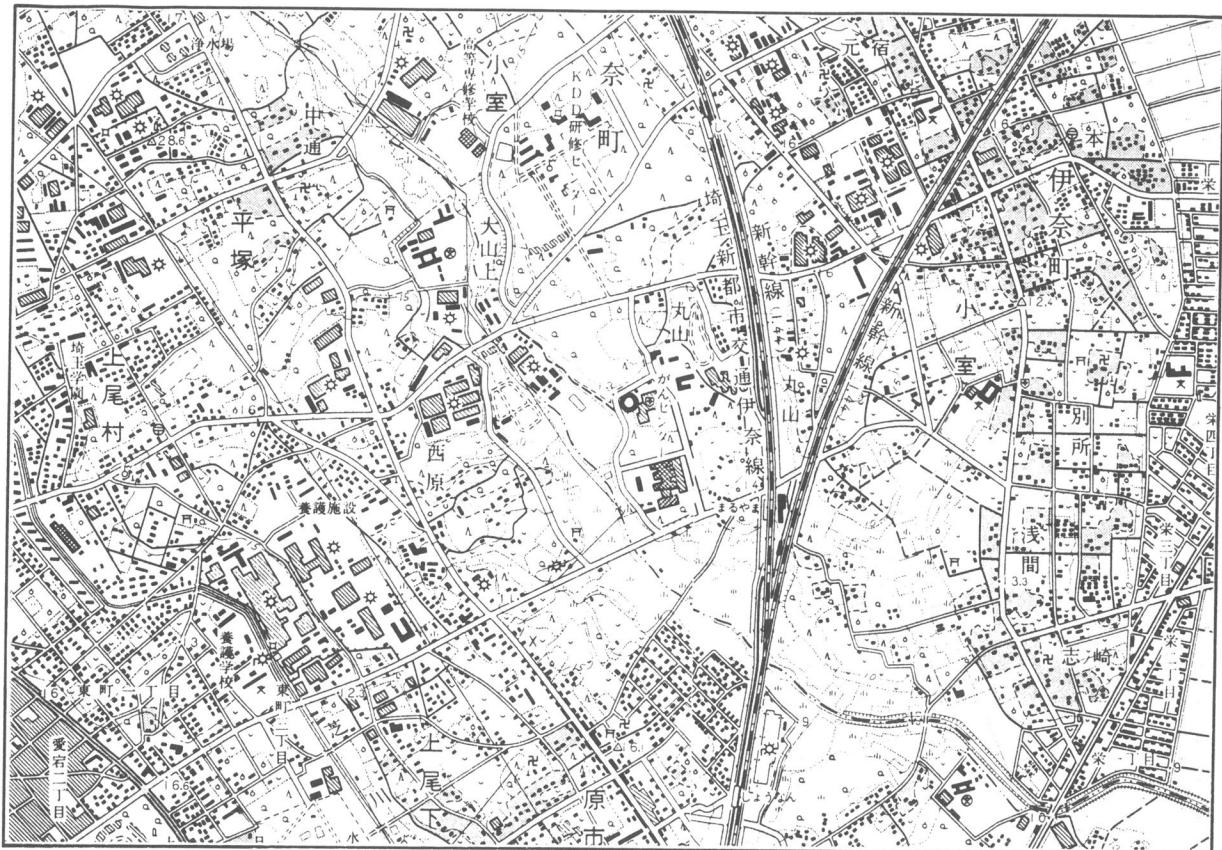
念のためここで岩宿時代の遺物分布をみておこう。当遺跡ではⅣ層上部（第1石器群、B地点）、Ⅲ層下位（第3石器群、A地点）、Ⅲ層上位（第2石器群、A地点）に文化層を有する三つブロックが確認されている。第3石器群はナイフ形石器1点をふくむ17点の石器群で、分布域の北端で8号土坑と重なる。第2石器群は8号土坑の東約20mに分布域の西縁がある。石器数27点からなるが指標的遺物を欠く。石器の出土層準はⅡ層下位からⅢ層中位にわたるという。また、ブロック外、土坑8号付近のⅡ層下部で細石核1点の単独出土例がある。

土坑内検出の木炭の測定年代を考慮すれば、第2石器群と細石核単独資料とは土坑の構築時期と関係をもつうるかもしれない。時期といえば気掛かりなのは、約4,500点をかぞえ、第I土器群として報告され出土総数の約6割を占めるという、撫糸文系土器群の存在である。

おそらくA類を除く25例は、報告者は所属時期に言及していないようであるが、これらの土器群と無関係ではありえないであろう。さらに土坑の類型区分のところでもふれたように、A類の土坑の所属時期の最終的な決着にも、こうした事実は影響を与えるにはおかないとだろう。結局、ここで問題にした土坑群は、時期確定資料として扱うには、さらなる検討が必要のように思われる。

表24 木の根遺跡土坑計測表

土坑番号	開口部(m)		底部(m)		深さ (m)	土坑番号	開口部(m)		底部(m)		深さ (m)
	長	幅	長	幅			長	幅	長	幅	
2	1.5	1.4	1.0	0.8	1.5	7	1.2	1.1	1.0	0.7	1.5
4	1.7	1.7	2.9	0.6	1.6	8	1.05	0.9	0.95	0.7	0.8
5	1.9	1.6	1.1	0.8	1.4	16	2.3	1.6	0.8	0.65	2.4
6	1.6	1.6	1.0	0.8	1.5	24	2.3	2.0	1.4	0.85	2.7

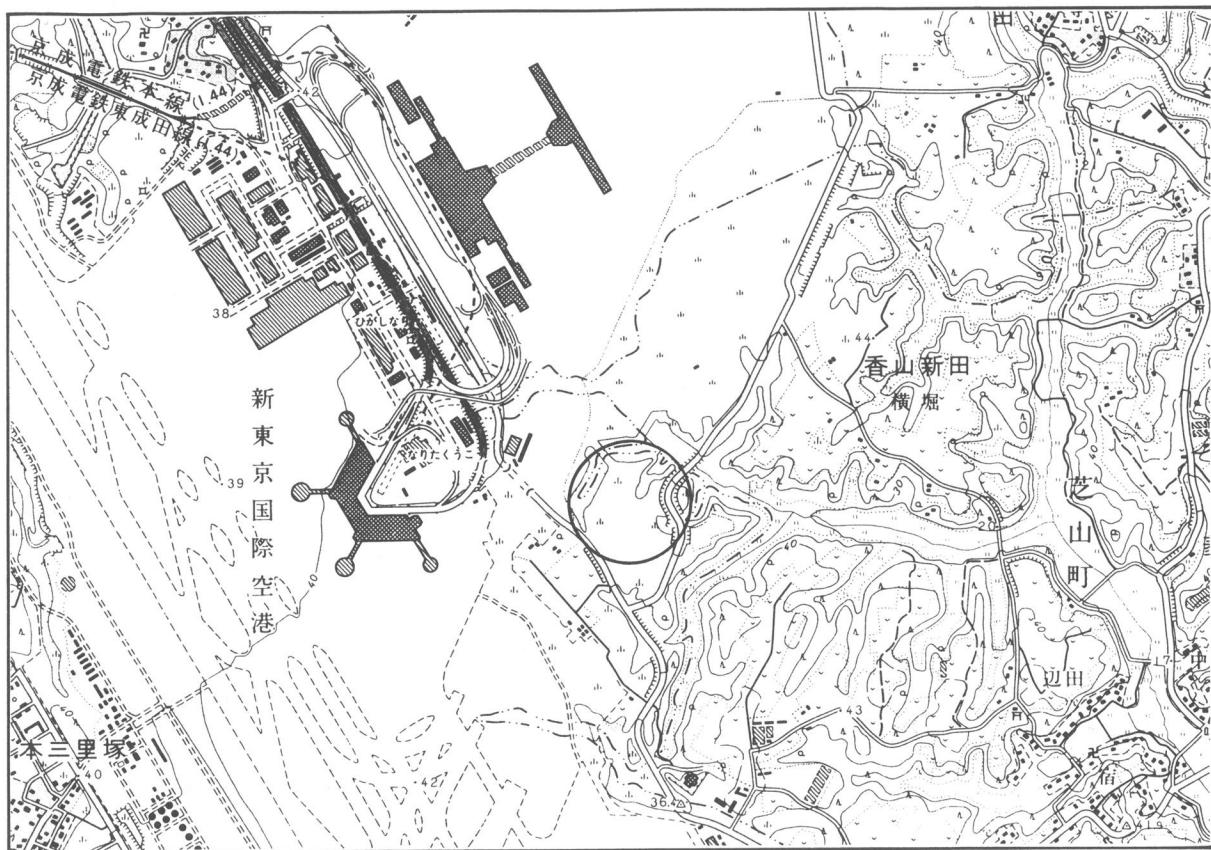


第102図 大山遺跡と周辺の地形 (1/25,000 上尾・岩槻)

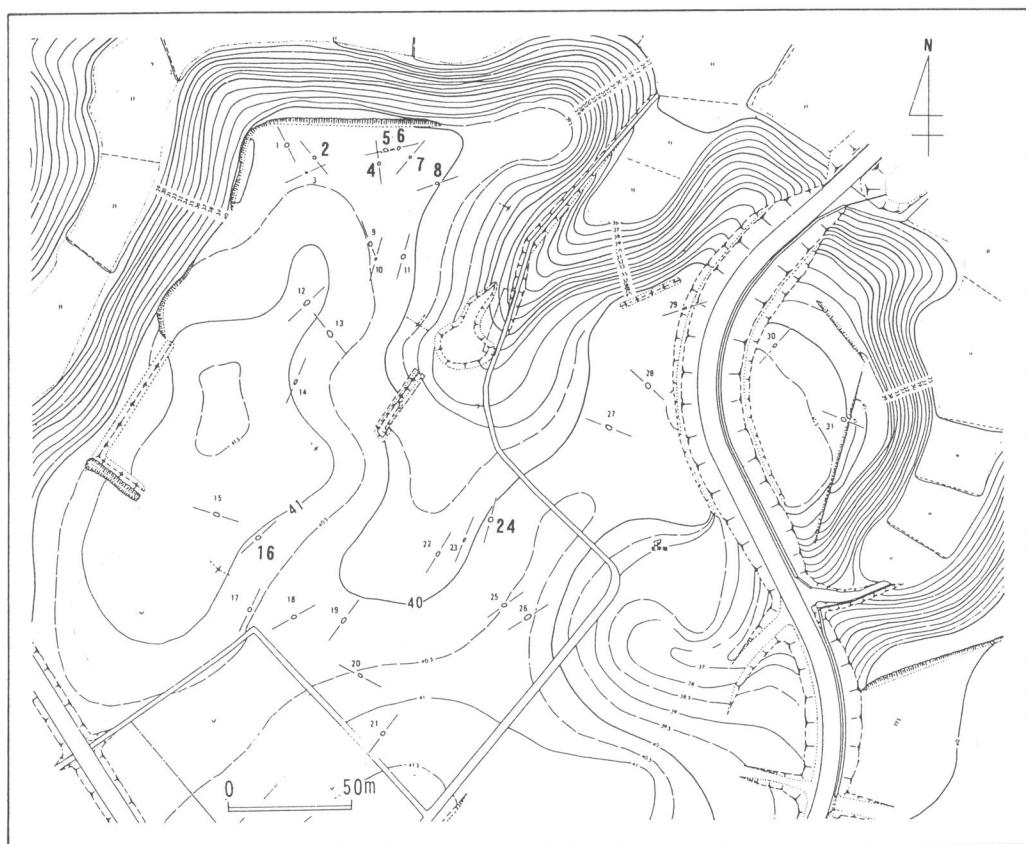


第103図 大山遺跡土坑実測図
(1/50)

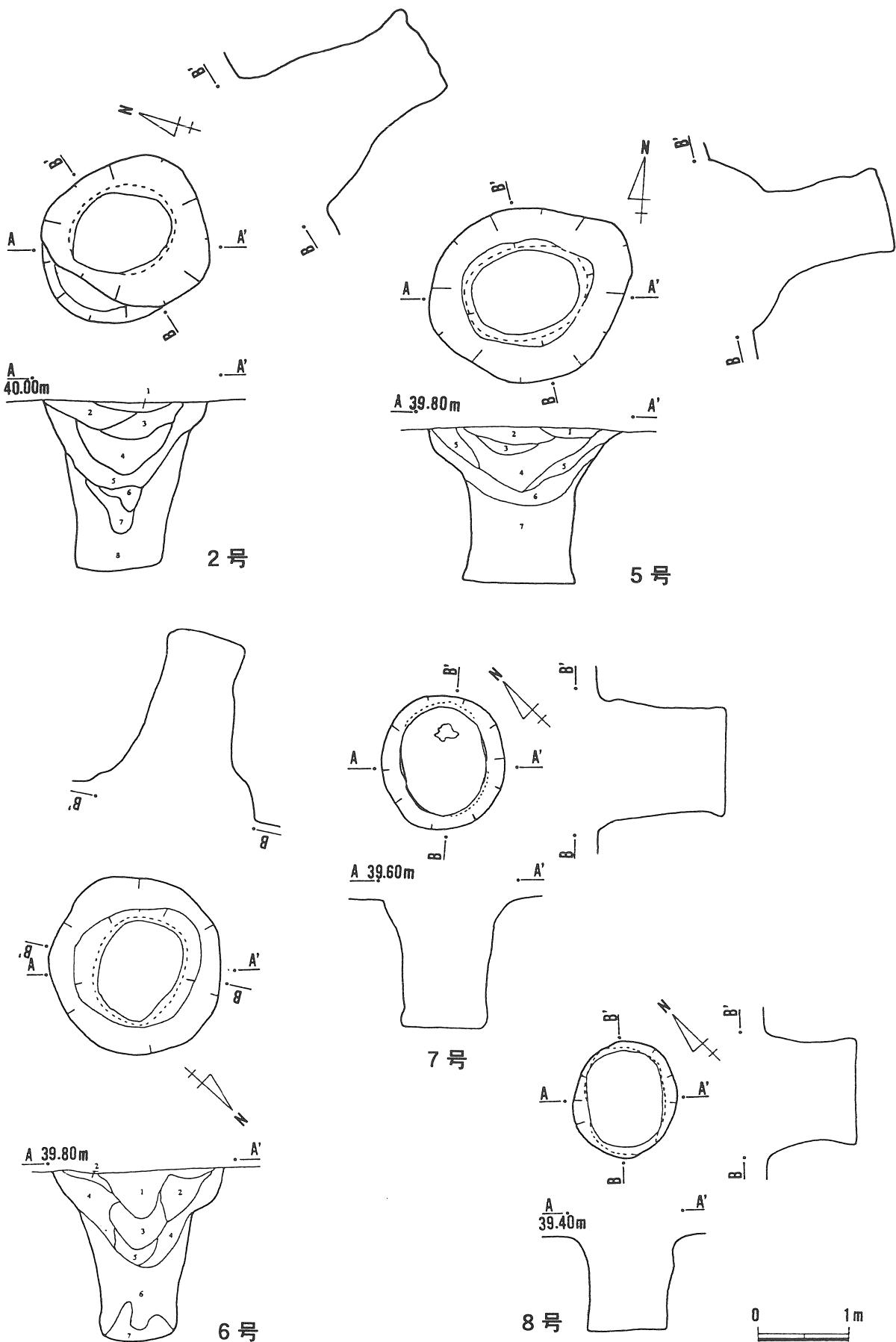
第104図 大山遺跡土坑位置図



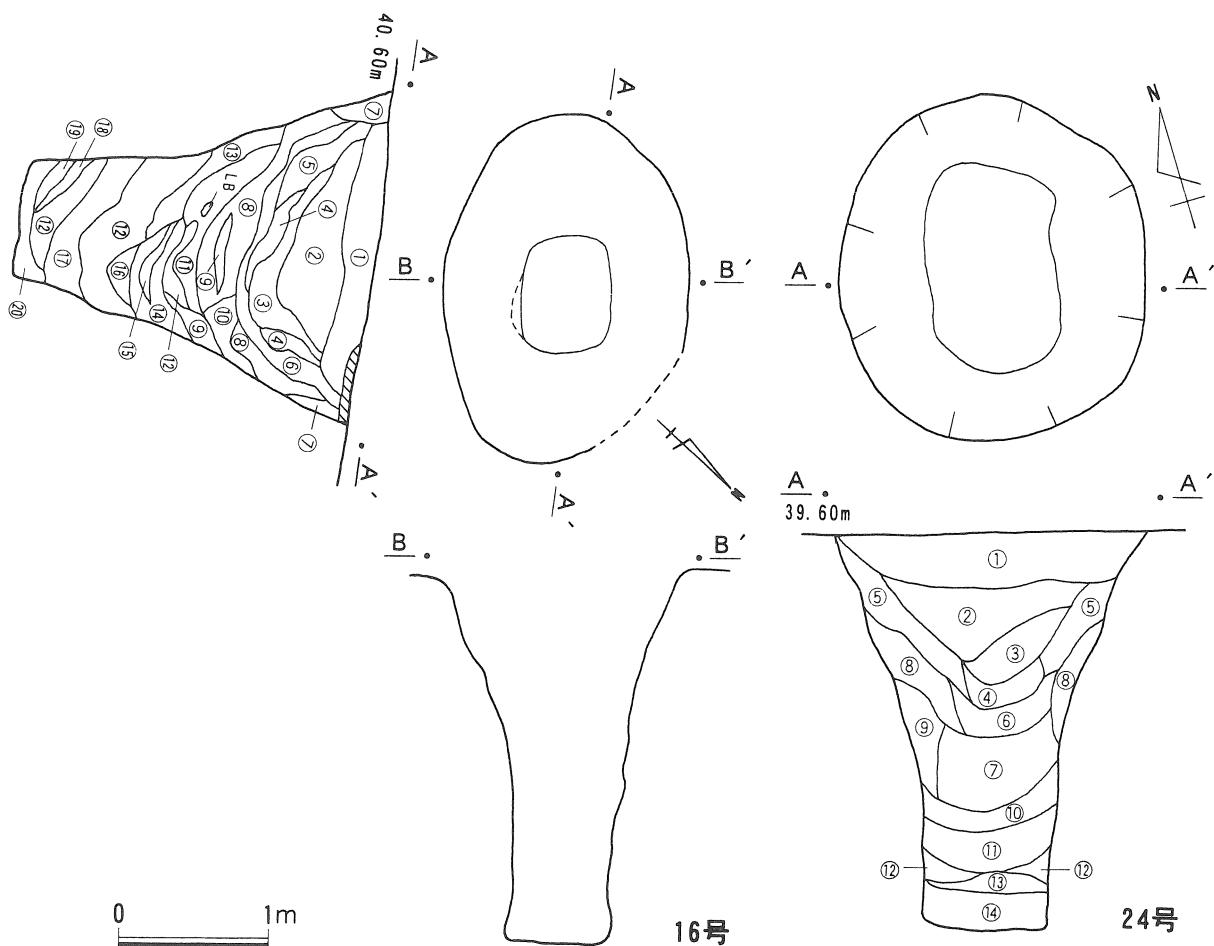
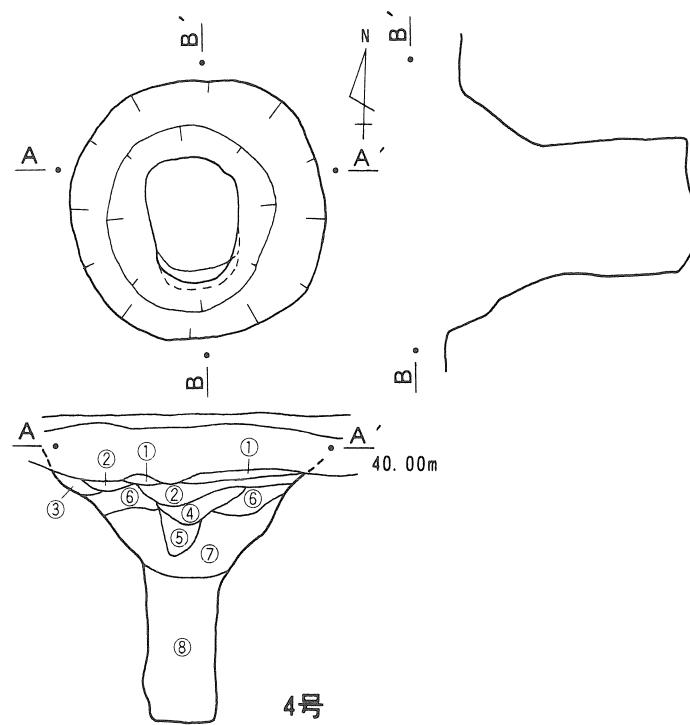
第105図 木の根（東京国際空港No.6）遺跡と周辺の地形（1/25,000 新東京国際空港）



第106図 木の根遺跡土坑位置図



第107図 木の根遺跡陥穴状土坑実測図(1) (1/60)



第108図 木の根遺跡陥穴状土坑実測図(2) (1/50)

16・24号は草創期とされる一群より一層新しい時期の所産と考えられる例

(7) 東京都ICU Loc.15遺跡

武蔵野台地の南縁に位置する。台地は扇状地性の大段丘面であって、西方から東方に向かって扇を広げたように広大な平坦面がひらけている。遺跡は武蔵野段丘の南縁を画する国分寺崖線上に位置する（第109図）。標高差15mで崖線直下を野川が流れ、ここから多摩川まで立川段丘面がひろがる。野川流域はあらためていうまでもなく、日本を代表する岩宿、縄文時代遺跡の密集地帯であって、周辺には著名な遺跡が崖線上に多数つらなるように分布している。

付近では、他の諸例に多くみられるように大きな谷が台地を開析して舌状の張出し地形を形成するようなことはなく、崖線のあちこちに刻まれたノッチ状の窪み（ハケ）を目安に、それぞれの遺跡が設営されているような印象がある。当遺跡もそうした遺跡の一つである（第110図）。標高約60m。

遺跡そのものが崖線に沿って立地しているために、ここで確認された土坑も崖の肩がゆるく傾斜しあじめるような崖際に位置している。

土坑の平面形は橢円形で、断面は下底にいたるほど狭くなる袋状を呈する。大きさは、長径105cm以上、短径約90cm、深さ約110cmある（第111図）。

掘り込み面はIV層中位にある。

土坑内では53点の焼け礫が出土した。大多数が割れていたという。IV層中からは5基の礫群が発見されているが、そのうちNo.5がこの土坑中で見いだされた礫一括資料である。礫は土坑の上部から下半部にかけて出土し、あたかも土坑の掘り方に沿うように落ち込んでいたという。この他に台形石器やチップが出土している。

IV層中には2枚の文化層があり、礫群、石器群をともなっている。分布状態ははっきり示されていないが、礫群や石器群の分布位置と土坑の位置とは、あまり隔たっていないか、重複しているようである。

当遺跡における土坑は、坑内に多数の遺物を含んでいるという点や形態も他の諸例とやや異なっているという意味で、特異な存在というべきかもしれない。このあたりの事情をふまえ、報告者は礫群、土坑検出の意義を次のようにまとめている。

1. 土坑中の礫は土坑とセットをなす。
2. 磕は焼けているが、他の場所で焼かれたものである。
3. 土坑は徐々に埋まったものではなく、一時的に埋められた可能性が高く、ピット上面礫群が流れ込んだとは考えられない。

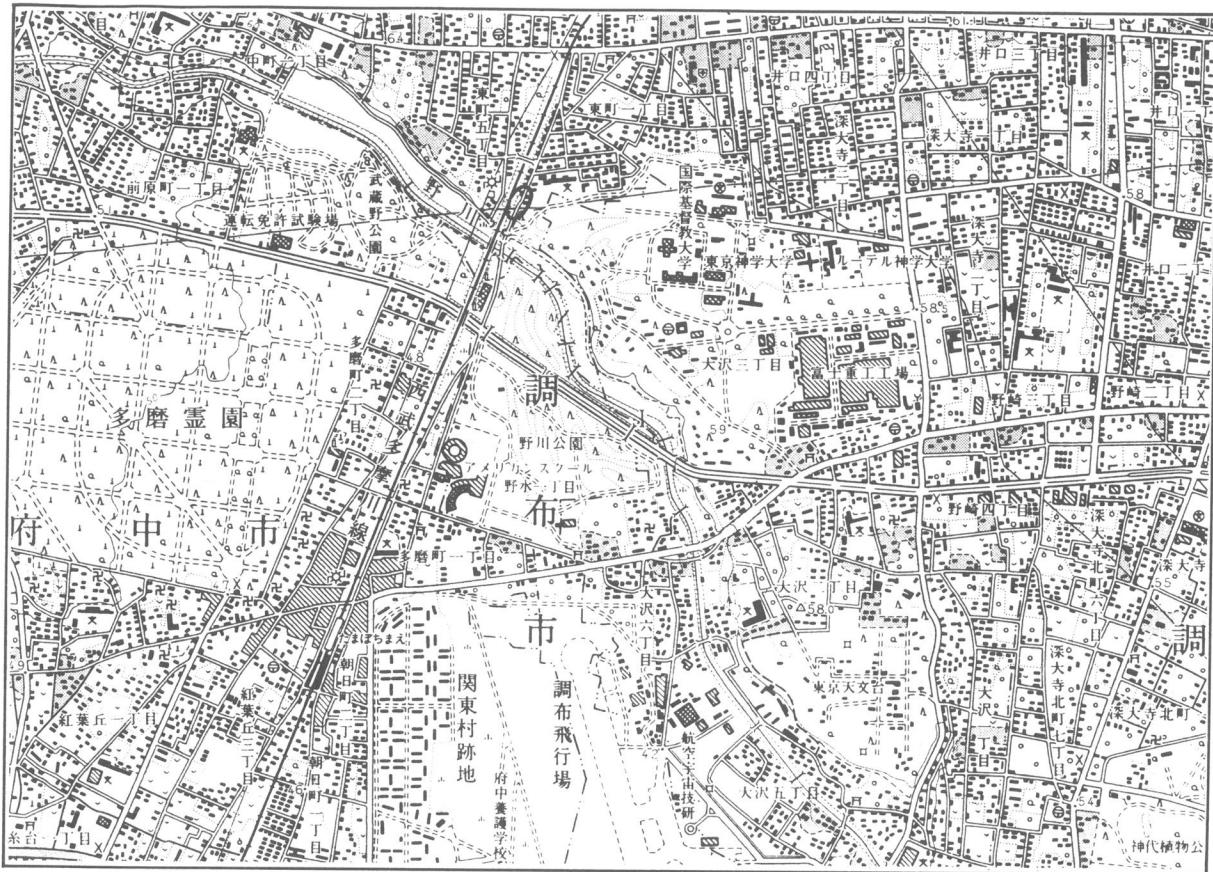
そして、これらを考慮して、a) 貯蔵、b) 料理、c) 埋葬用の可能性が考えられると結んでいる。いずれにしろ、特異な性格、出土状態をしめし、重要な資料的価値を有した1例である。

なお、非常な密度で調査が行われている野川流域において、本例のような発見例がいまだほかに報告されていないことは、検出の難しさという技術的な問題はあるにしても、そして武蔵野台地の北縁で四葉、菅原神社台地上の2遺跡の存在がつい最近になってしられるようになったとはいえ、当地の岩宿時代における陥穴状土坑の設置が、はなはだ低調だったことを窺わせるようにも感じられる。

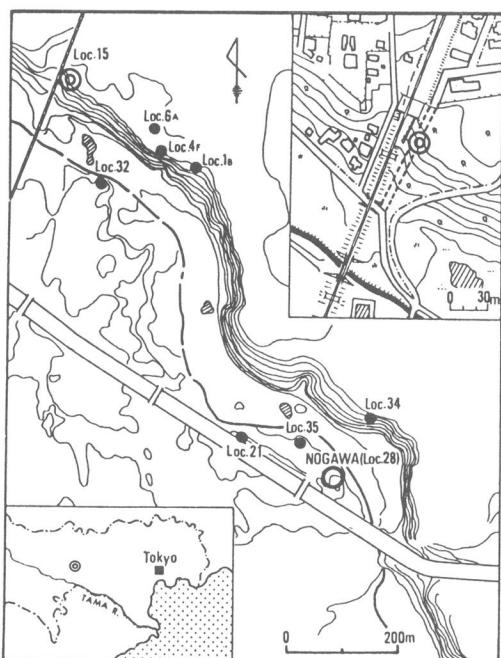
(8) 東京都四葉遺跡（E地区チ地点）

武蔵野台地は北東縁を荒川低地によって画される。遺跡の所在地は武蔵野台地の北東辺の中央部あたりにある。付近一帯は同じ段丘でも、ICU Loc.15周辺とは異なり、西から東にのびる扇状地の走向に沿った開析谷と、これに注ぐ小支谷が樹枝状に発達している。これが無数の舌状台地を作りだして、武蔵野台地南部の平坦面に対して、起伏にとんだ地形景観となってあらわれている。

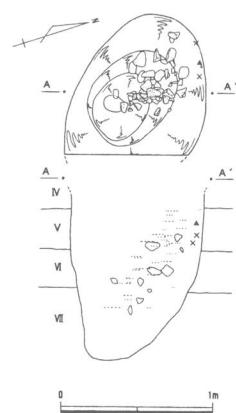
遺跡ののる台地はともに荒川に注ぐ白子川とこの東側の前谷津川に挟まれた位置にある。一帯は樹枝状の小谷がよく発達し、崖線は激しく出入りし多数の舌状地形をつくり出して、複雑な地形景観をみせ



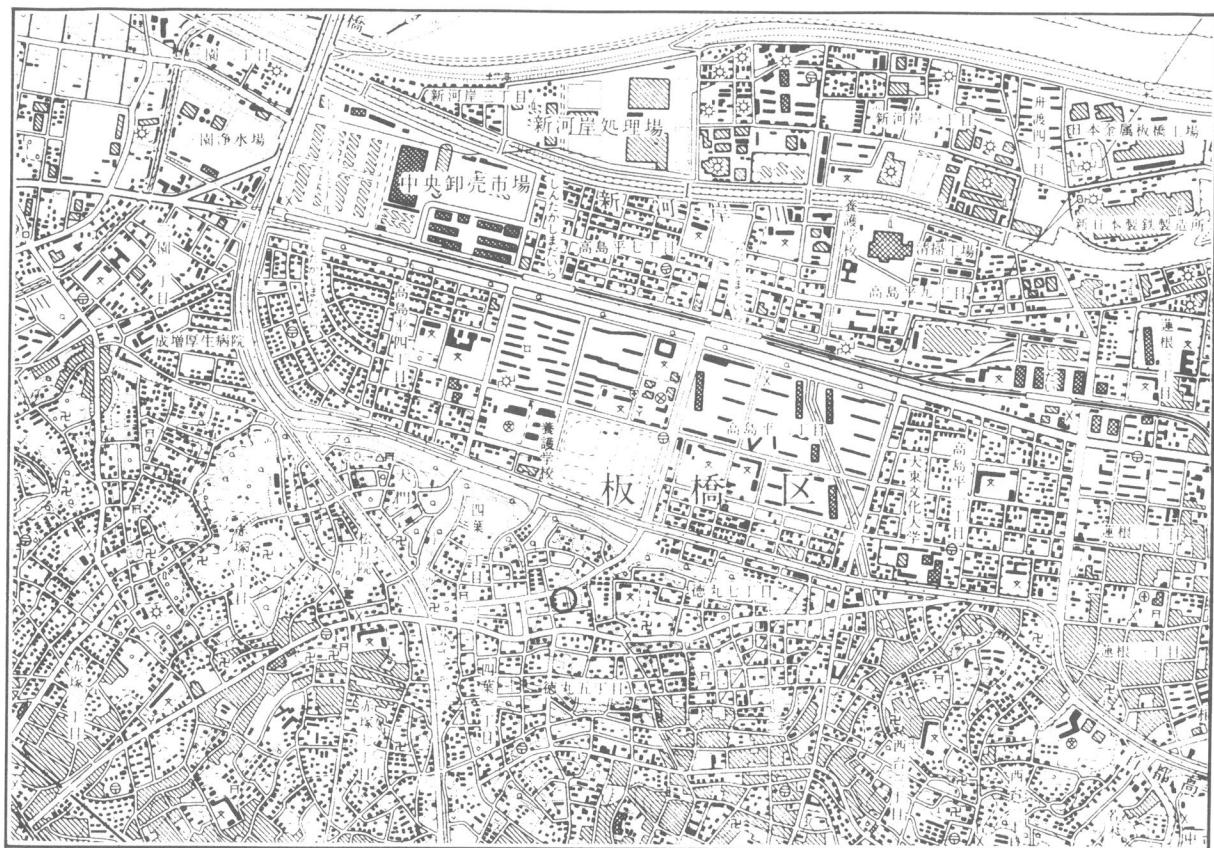
第109図 ICU, Loc.15と周辺の地形 (1/25,000 吉祥寺)



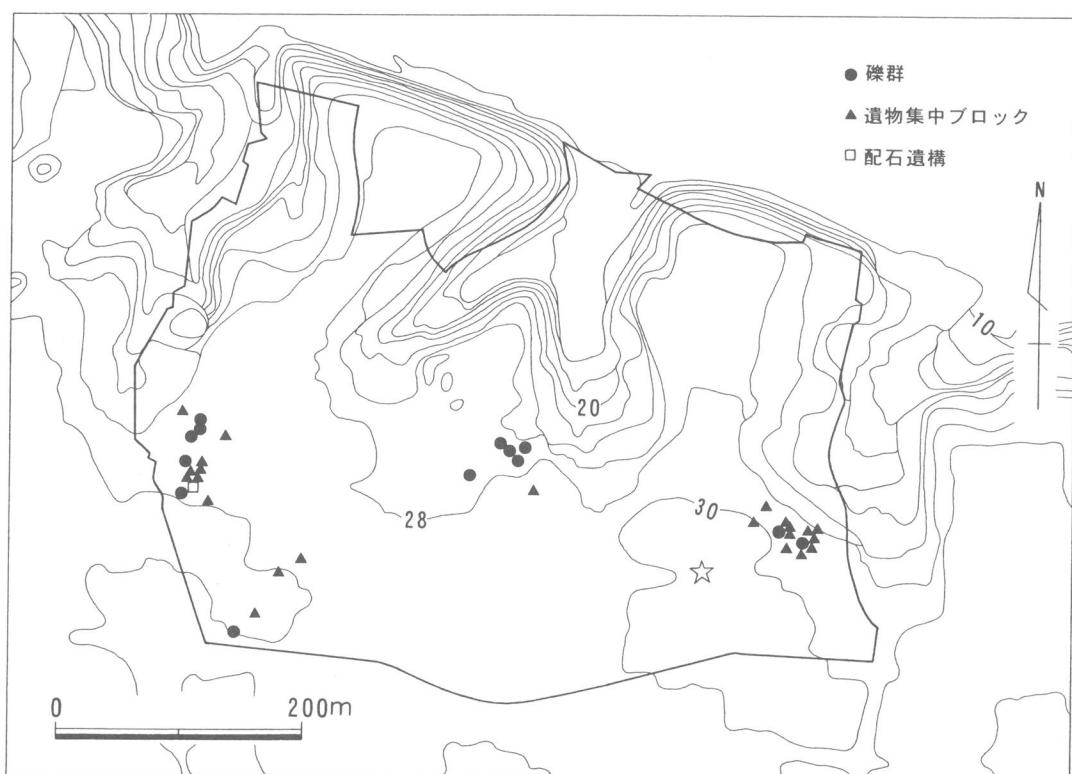
第110図 ICU, Loc.15と周辺の遺跡



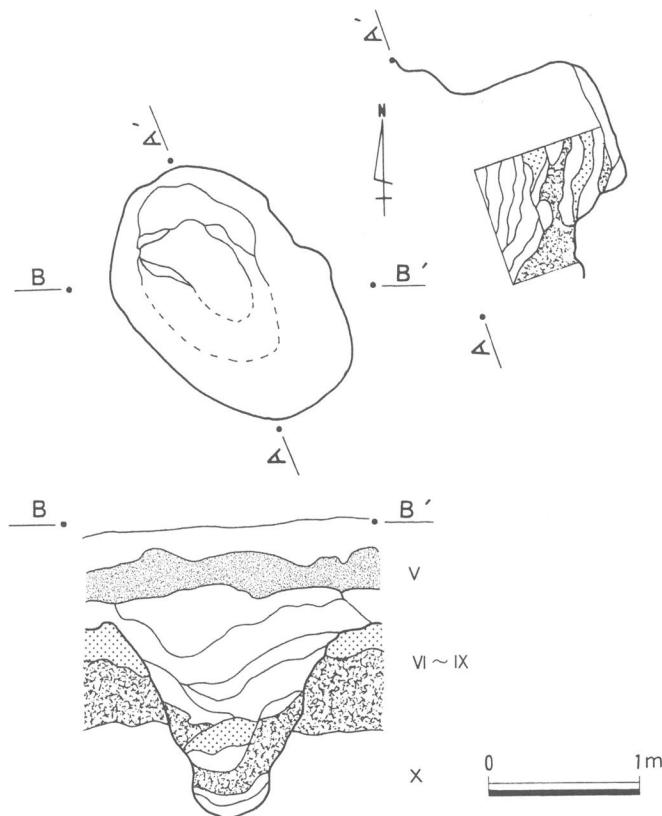
第111図 ICU土坑実測図 (1/50)



第112図 四葉遺跡E地区チ地点と周辺の地形 (1/25,000 赤羽)



第113図 四葉遺跡土坑位置図 (☆印 陥穴状土坑)



第114図 四葉遺跡土坑実測図 (1/50)

ている。こうした台地の一角に遺跡は立地する（第112図）。標高30m。

四葉地区遺跡群は東西600×南北400mほどの範囲を占め、区画のなかに入りこむY字状の谷によって、二つの大きな舌状部と一つの小さな舌状部に区切られている。土坑は東側の舌状台地の奥まった尾根部の中央に位置する。台地の縁辺部というよりあきらかに中央部（内奥部）に位置し（第113図）、長軸の方向は台地の走向にほぼ沿っている。土坑の平面形は楕円形で、横断面は底が丸くV字状に立ち上がり開口するバケツ状をなしている。縦断面では、底がやや平らで真っ直ぐに立ち上がった側壁が大きく外に開いて開口している（第114図）。大きさは長径180cm、短径110cm、深さ150cmを測る。

土坑はVI層上面から掘り込まれX層下部に達する。土坑内からの遺物は発見されていない。当遺跡ではIII層～X層まで岩宿時代の石器や礫群が検出されているという。また分布位置は谷頭部に集中するという。土坑の構築時期の遺構、遺物の分布関係の詳細を知りえないが、土坑とこれらの遺構、遺物群の分布域とはかなり明確なへだたりがあるようである。

(9) 東京都菅原神社台地上遺跡

武藏野台地東北縁中央部付近を東北流して、荒川に注ぐ白子川の下流右岸に位置する。1km足らずで荒川低地に至る。東方2kmには四葉遺跡が分布しているが、当遺跡周辺も樹枝状に谷が発達し、四葉地区同様の地形景観をみせている。

遺跡ののる台地は両側面を百向谷、コイド川谷に挟まれ、前面は標高差17mで白子川に面する。舌状の張出地形をなしている。台地の幅は400mほどあり、比較的広い。標高約30m。

土坑はこのような台地の一角で検出された。調査地面積は約6,400m²と広く、III層～VII層を中心に多数の遺物、遺構が発見されている。土坑は調査区東部にあってIV層上面で検出されたという。大きさは、長さ160cm、幅50cm、深さ70cmで、陥穴状の長方形を呈するという。詳細未報告。

(10) 東京都鈴木遺跡農林中央金庫地点

武藏野台地の中央部に位置する。一帯はどちらかといえば扇状地性台地の扇頂部寄りで、河谷の発達は弱く、平坦面がひろびろと続いている。鈴木遺跡は台地中央を東流する石神井川の源流谷頭部を、C字状に取り巻くように形成されている。農林中央金庫地点は谷頭部の南側にあって、北に張り出すながらかな斜面にあたる。したがって土坑の位置そのものも台地の端近くに設けられたものと理解できる（第115、116図）。

土坑は北半部を破壊されているために、正確な形状を知ることができないが、残存部分からみて、ほぼ円形の平面形をもっていたものと判断されている。側壁の掘り方が凹凸に富むが、断面形は下底面が平らですり鉢状をなす。

大きさは直径300cm、深さ120cmを測り、下底面は一辺約120cmの方形を呈する。

土坑の掘り込み面はハードローム上面ないしソフトローム下部にもとめられるという。確認面の位置、土坑内出土のナイフ形石器を含む3点の石器からみて、土坑の構築時期はⅢ層下部からⅣ層上部に位置づけられるという。

形、大きさとを他の諸例と比較して、特異な一例というべきかもしない。

(11) 神奈川県長井台地遺跡群

三浦半島は相模灘に長く突き出た半島である。半島は横須賀市をすぎて三浦市域南半部にいたって一層幅を狭め、これより先はヨキ状を呈して、半島の最先端部を形作っている。遺跡はこのヨキの付け根あたりに位置する。

三浦半島の横須賀市域は大楠山（242m）を中心として急傾斜の丘陵地帯であるが、三浦市域に入って地貌が一変し、複雑に入り出する谷に囲まれたなだらかな台地が展開する。土坑の検出された長井台地もこのような台地上にある（第118図）。標高30m。

長井台地は南北約2km、東西50mほどの細長い台地である。東側を直線的に沖積面で画され、相模湾に面した西側は深い谷に刻まれた舌状台地が幾重にも張り出している。

3基の土坑は台地の南半中央部で検出された（第119図）。1号2号間約30m、2号4号間約100mの間隔をおいて点在する。いずれも旧施設による破壊が激しく、全容をよく把握できない（第120図）。

1号土坑：半分ほどを残しているとみられる。平面形は円形、断面形は土坑底に平坦面をもち、上部が開きぎみの筒形ないし深鉢状である。最大径95cm、深さ150cmである。掘り込み面は確認できない。ただし土坑中の土砂の鉱物分析結果によれば、AT直下の標準土層に似るという。

2号土坑：平面形は楕円形。長径86cm、短径62cm。検出面はVI層上部とのみ報告されている。

4号土坑：平面形は円形と推測される。断面は漏斗状。最大径125cm、深さ84cm。掘り込み面は当地のソフトローム層であるI層上部～中部と推定される。

土坑の所属時期は1号がAT相当層（当遺跡群標準土層IV層）直下、4号がAT上位ソフトローム層中ということになる。

土坑中からは遺物は出土していないが、土坑外の遺物、遺構分布も多くない。ナイフ形石器文化の1号ブロック、礫群各1、細石刃文化期の2、3号ブロック、ブロック外でナイフ形石器2点を含む6点の石器の出土が報告されている。

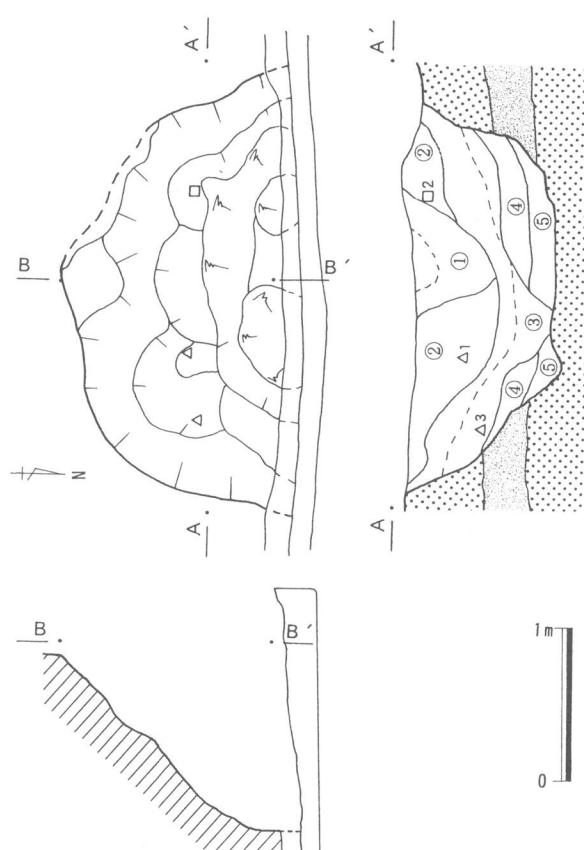
1号ブロックはI層下部～II層上部にかけて、2、3号ブロックはI層下部に検出層準があるから、ともに4号土坑の構築時期と関連する可能性はある。ただし、距離は150m以上隔たる。これに対し1号土坑に關係する遺物分布は認められなかったことになる。



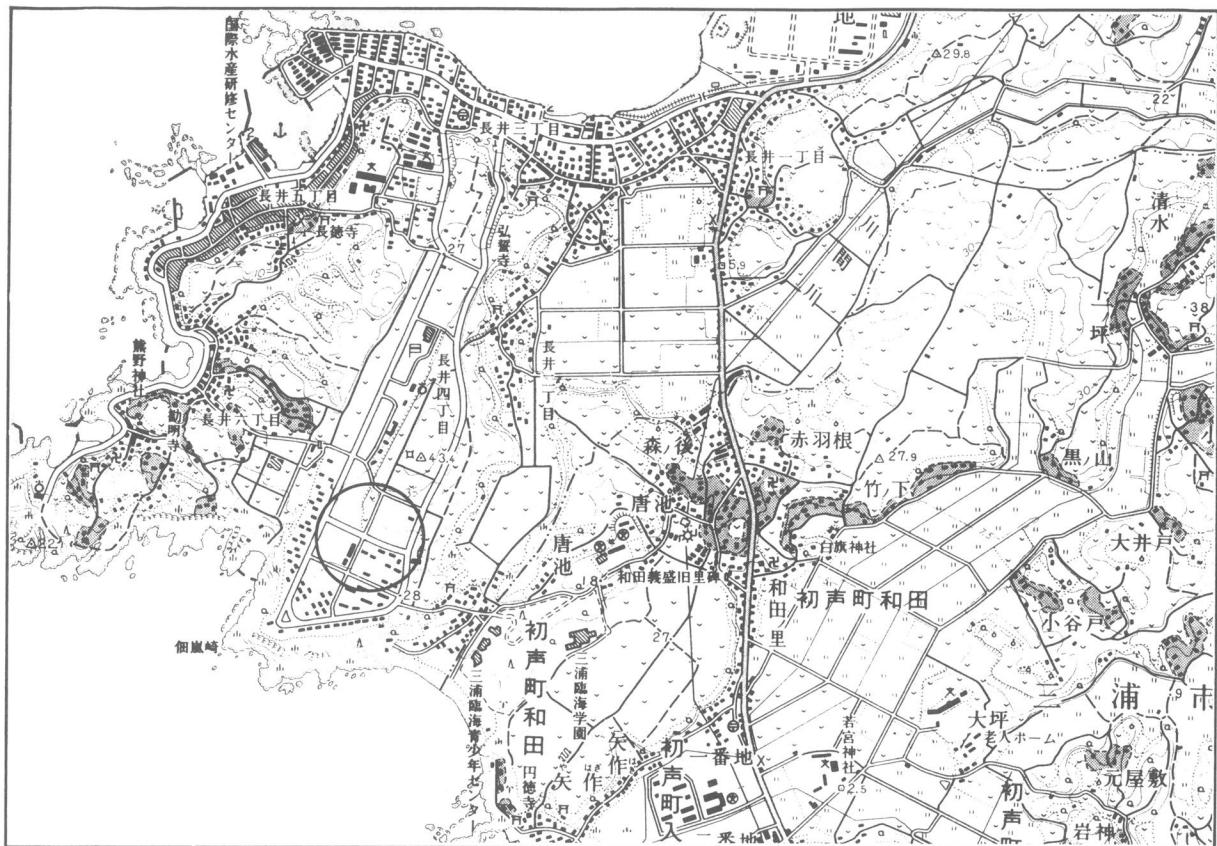
第115図 鈴木遺跡(1)および同農林金庫地点(2)と周辺の地形 (1/25,000 吉祥寺)



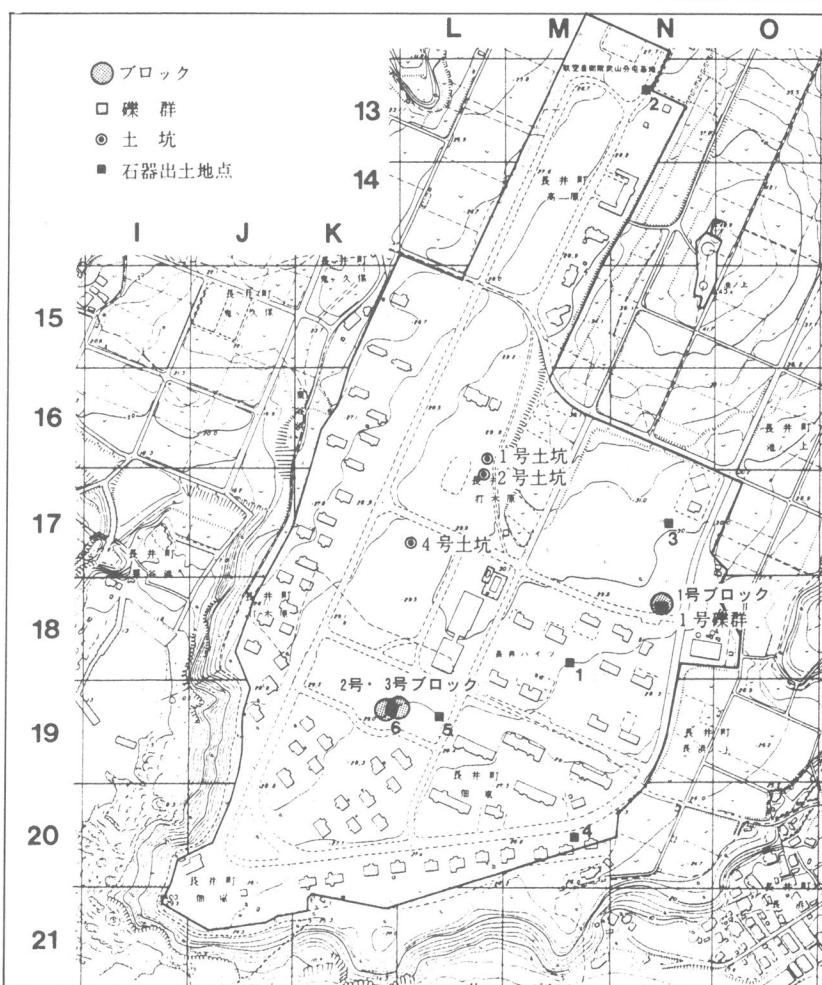
第116図 鈴木遺跡土坑位置図



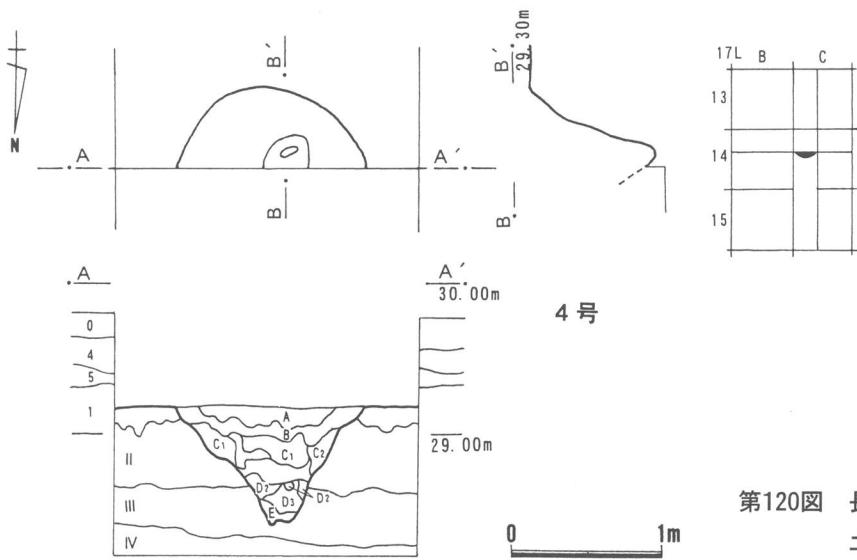
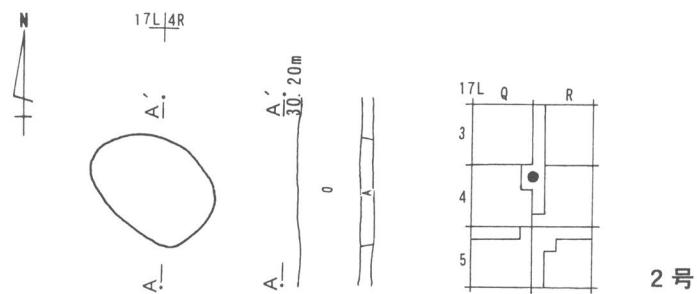
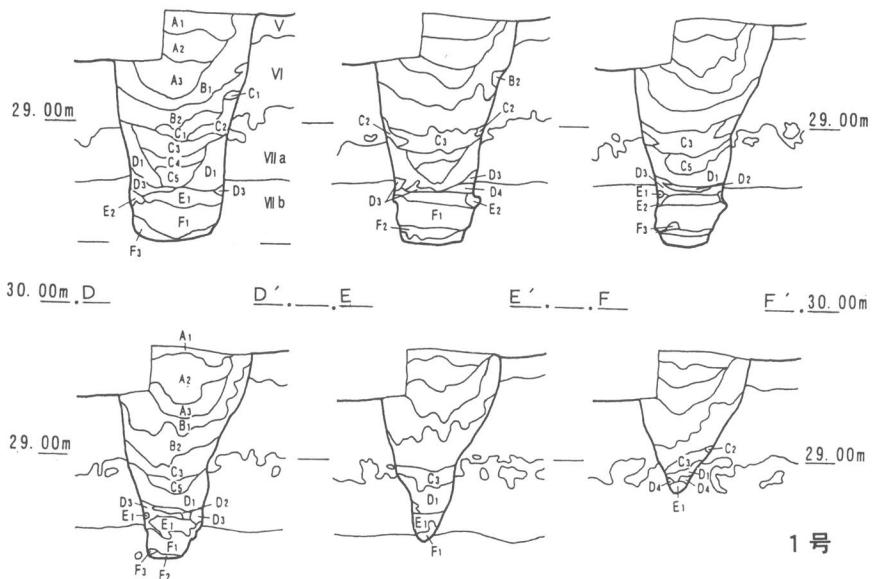
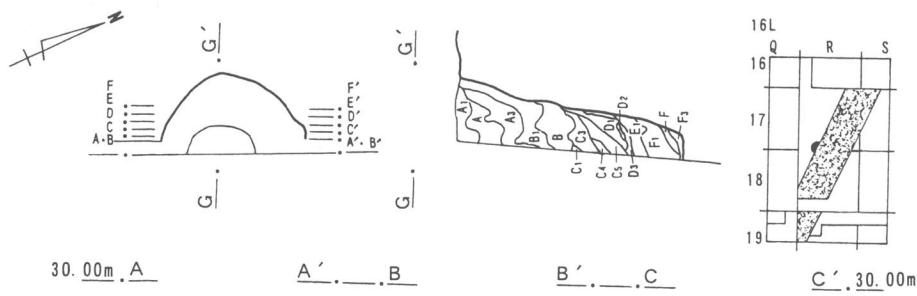
第117図 鈴木遺跡土坑実測図 (1/50)



第118図 長井台地遺跡と
周辺の地形
(1/25,000 秋谷・浦賀)



第119図 長井台地遺跡
土坑位置図(1区画、100m)



第120図 長井台地遺跡
土坑実測図 (1/50)

(12) 福岡県椎ノ木山遺跡第2地点

福岡県の東北端北九州市若松区に所在する。当地域は西方を遠賀川、東方を洞海湾、北は響灘に囲まれた半島状を呈する。遺跡はこの半島状地域の中央に位置する。南側直下を東流して洞海湾に注ぐ江川、東、西、北側を沖積地に囲まれた独立丘である。一帯は同様の小山状の丘陵地形がひろがる（第121図）。同地の低位段丘に相当すると言う。標高約25m。発掘調査はこの丘の頂部から尾根にかけて、長さ約60m、幅40mの範囲の比較的急な斜面上でなされている（第122図）。岩宿時代の住居と推定される遺構2基、土坑8基をはじめ中世の遺構が発見されている。

陥穴状土坑（7号土坑）は、貯蔵穴として報告されたもので、発掘域中の最高所の丘陵頂部で検出された。土坑の平面形は円形、断面形は底が尖り気味の筒形あるいは尖底深鉢状を呈する（第123図）。大きさ長径80cm、短径73cm、深さ103cmをはかる。

遺物は土坑中から石核、敲石、剥片を含む5点が発見されている。またここから北側30mほどの範囲で、ブロック2ヵ所をふくむ石器分布域があり、2側縁加工のナイフ形石器6点？を中心に、彫器、細石刃などを含むある程度まとまった量の石器が出土している。したがって、土坑がこれらの石器群とくわめて近い位置関係で存在していた可能性はある。

土坑の検出は岩宿時代遺物の包含層であるⅢ層においてなされた。地形や堆積条件に恵まれていないこともあって、層位的に掘り込み面や時期を決定することは難しい。一応AT上位としておく。

(13) 長崎県牟田の原遺跡

長崎県平戸島中央東南部にある。平戸島は島全体が長い尾根状の低丘陵地からなっていて、起伏にとんだ山がちな土地柄である。しかし、当遺跡は周囲を低い丘陵に囲まれた盆地状地形の一角で小河川の水源となる小規模な湿地帯となっているところである。海岸まで1.5kmの距離にあり、丘陵上の小盆地中にあるので、高原地の雰囲気がある（第124図）。標高97m。

発掘地点は、湿地状の現水田面を取り巻く周囲の丘陵からのびた低い高まりに設けられている。土坑は長さ30m余りの調査区ほぼ中央で検出された（第125図）。

土坑の平面形は円形。坑底は平らで側壁はほぼ真っ直ぐに立ち上がり、断面は鍋型を呈する。直径約90cm、深さ30cm。坑底中央やや東よりに、直径約20cm、深さ40cmほどの小ピットがある（第127図）。

土坑の検出は第Ⅱ文化層とほぼ同じレベルでなされたという。

土層は11層に区分され、4枚の文化層が下から順に認められた。第Ⅰ文化層は台形石器によって特徴づけられ、第Ⅱ文化層はナイフ形石器、剥片尖頭器、三稜尖頭器、彫器などに特徴がある。第Ⅲ、Ⅳ文化層は量が少なく時期や性格は明らかでないという。ここではATが8D層中、上位で検出され、第Ⅱ文化層はこの直上に位置するという。なお、同文化層では調査区全域に多数の石器が面的に出土している（第126図）。

第Ⅱ文化層中で発見された土坑は、現状では深さ30cmほどで、本来はまだ相当に深かった可能性が高い。標識断面で対比すると、検出面より上位に80cm前後の土層があるから、土坑の掘り込み面は、かなり上方にあったと考えたほうが理解しやすい。おそらく所属時期は当遺跡でいえば第Ⅲ・Ⅳ文化層の方に関連するとみるべきであろう。

(14) 宮崎県垂水第1遺跡

宮崎県南部、宮崎平野の外縁部にある。一帯は洪積台地がひろびろと展開し、沖積地からは台地上の平坦面が長くのびている様子がよく遠望できる。

遺跡はこうした台地上に位置するが南3kmの大淀川や東方の平野に注ぐ谷が幾筋ものび、樹枝状谷が

発達する。周辺にはこれに画された典型的なやせ尾根状の台地がつらなっている。遺跡の占める場所は、こうした樹枝状谷に囲まれてできていくつもの舌状台地の付け根の部分にあたっており、付近は幅250mほどの例外的に広い平坦部をとどめている（第128図）。

発掘調査は台地中央を縦貫する道路予定地で実施されたので、発見された2基の土坑は、台地のど真ん中に位置していることになる。土坑間の距離は16mである（第129図）。

W-10グリッド1号（W1）

平面形は検出面・下底面ともに長方形、縦断面は底が平らでバケツ状を呈し、横断面はV字形に近い。側壁はまっすぐ掘られ、下底面は狭いが平らで、定規で引いたような幾何学的なプランを有する。大きさは検出面で長さ142cm、幅61cm、深さ137cm、下底面で長さ80cm、幅14cmを測る。

検出面はIV b層。土坑内で細石刃1点、剥片3点が出土している。

M-1グリッド1号（M1）

平面形は検出面で楕円形、下底面で方形を呈する。断面は中間部でくびれ、下部で外にひろがるプラスコ状ないし糸巻状を呈する。大きさは長径120cm、短径92cm、深さ152cmを測る。側壁中間のくびれ部も方形であるので、平面形も本来方形であったかもしれない。土坑内からの石器の出土はなかったようである。検出面はIV b層。

二つの土坑の長軸の方向は、この位置する場所が放射状にのびる舌状台地の付け根の部分にあたっているので、台地の走向に直行するとも沿うとも、いえないような実情である。

土坑付近では、12ブロックからなり、ナイフ形石器、角錐状石器、剥片尖頭器を含む777点の石器と7基の集石が検出されている。土坑はこれらの外縁ブロックに位置している。

土坑の検出面IV b層はこれらの遺構、遺物の包含層であり、ATは未確認ではあるが、上記のナイフ形石器他の石器群の特徴はAT上位の時期を示すとされる。W1号出土の細石刃とされるものは、1点のみであるので、二つの土坑はともに先のナイフ形石器を基準として時期を考えうるものと捉えておきたい。⁽²⁾

二つの土坑は一見まったく形状を異にするようにもみうけられるが、下底面がともにはっきりした方形であることは、こうした例が他に多くないだけに、当遺跡の共通した特徴の一面を示しているとみることができるかもしれない。

(15) 宮崎県南学原第2遺跡

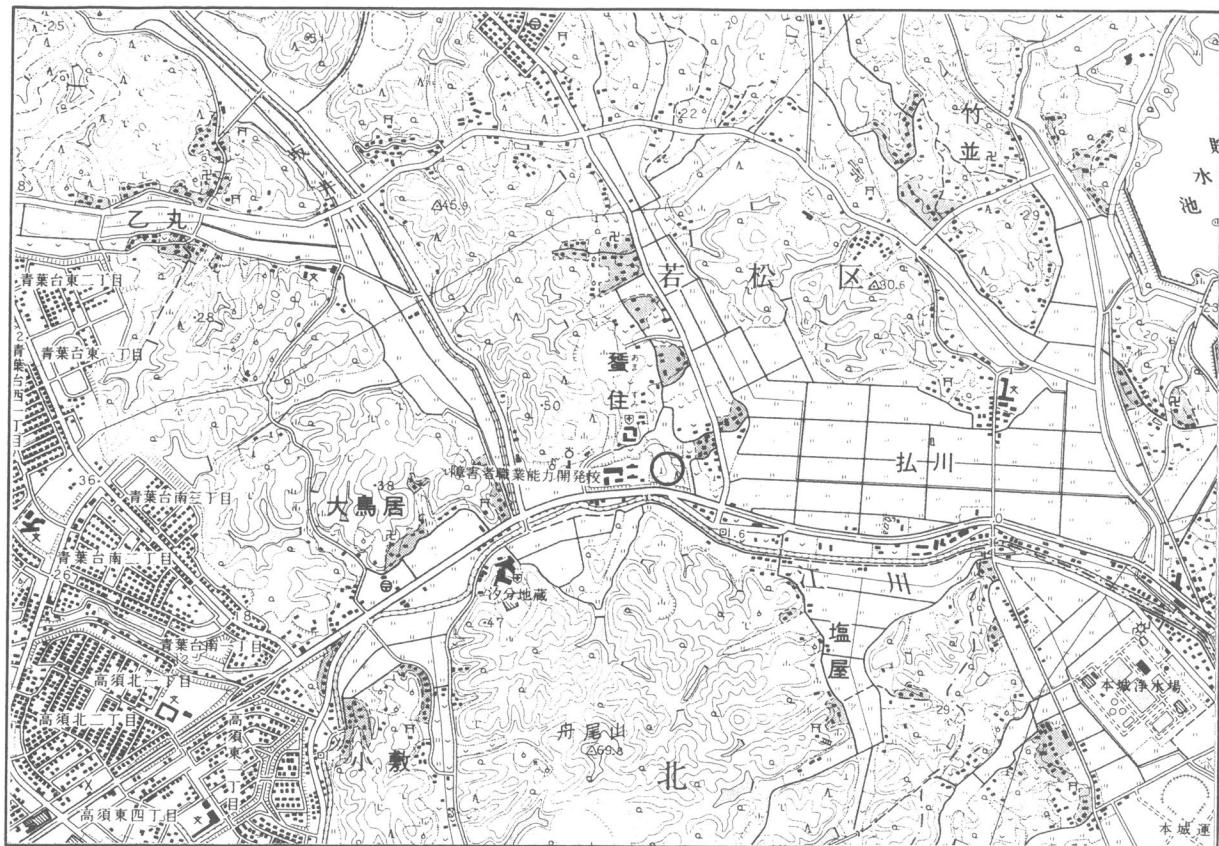
宮崎県下では、宮崎郡佐土原町内の同遺跡で類似の土坑2基が検出されているという。検出層準は垂水第1遺跡同様、小林軽石層を含む層の直下である。詳細不明。未報告。

(16) 鹿児島県仁田尾遺跡

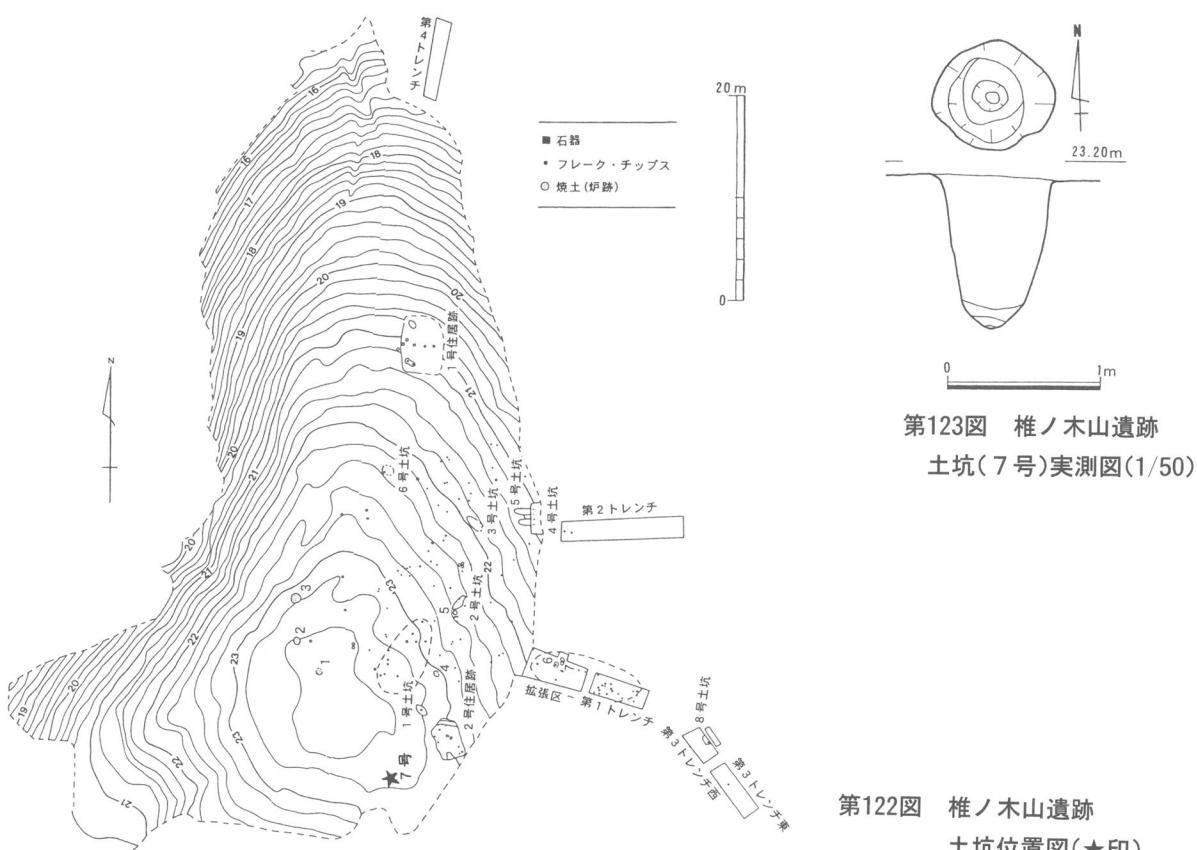
鹿児島市内西方約8km、鹿児島県西南部薩摩半島の付け根付近にある。一帯はシラス台地が広く分布し、薩摩中央台地と呼ばれるように、平坦な地形がひろく展開している。周辺は樹枝状の谷が縦横にのびて、多数の舌状台地を作りだしている。遺跡もこうした開析谷の谷頭が四方から迫る舌状台地の上に位置している（第130図）。標高195m。遺跡の西南方至近の距離には、シラスをのせない低い丘陵がのびてきていて、この尾根筋の上を境として、谷頭を東西に分かつ分水界となっている。

結局、遺跡は南方10kmの高峰（445m）つづきの低い丘陵を背後にひかえ、まわりを谷頭に囲まれた複雑に屈曲した谷線に囲まれた、舌状台地の上に立地しているということになる。

土坑は16基発見された。100×40mほどの調査区の西半部に、ひろく散在分布するようである（第131図）。位置的には西北から入る谷頭部の周辺に集まっているとみることができるかもしれない。

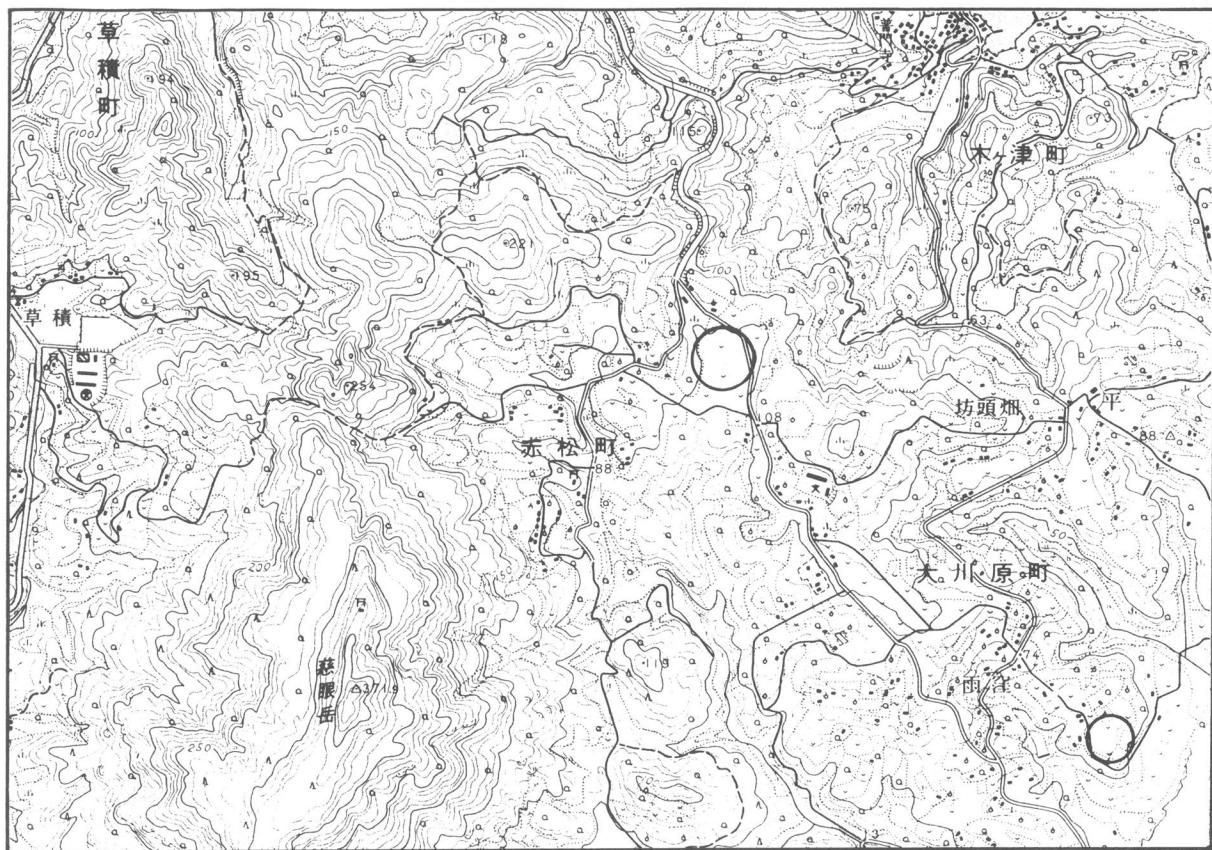


第121図 椎ノ木山遺跡と周辺の地形 (1/25,000 折尾)

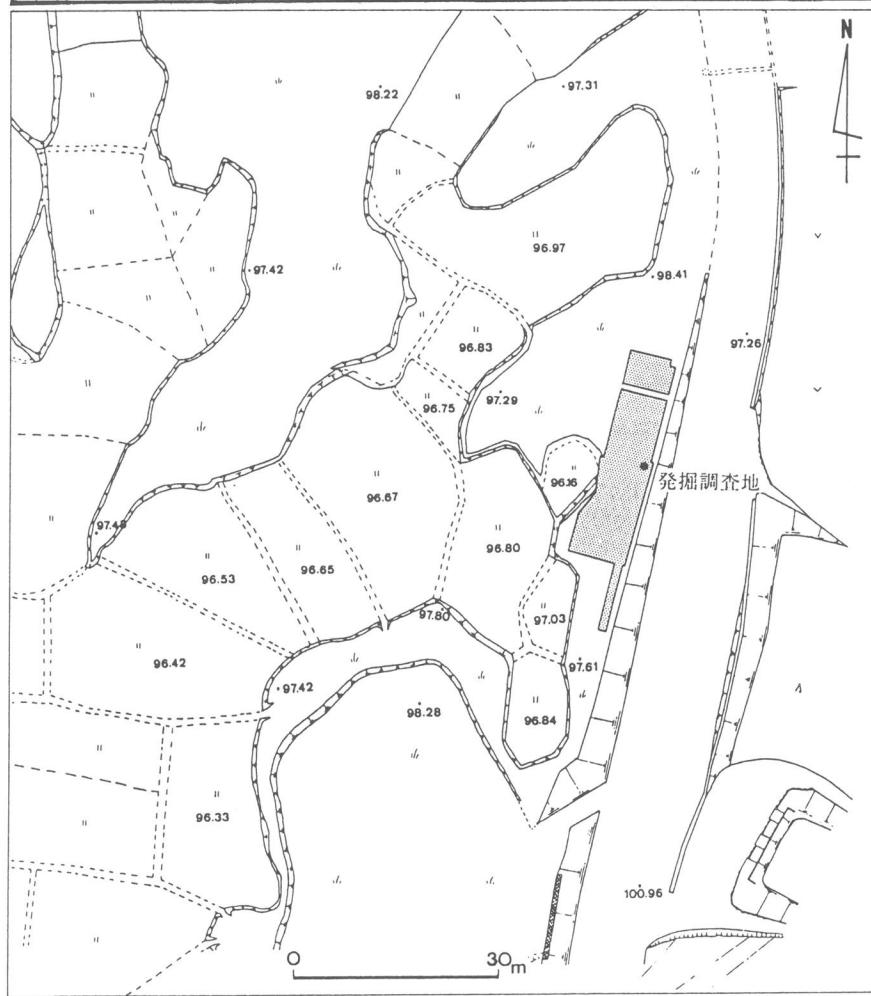


第123図 椎ノ木山遺跡
土坑(7号)実測図(1/50)

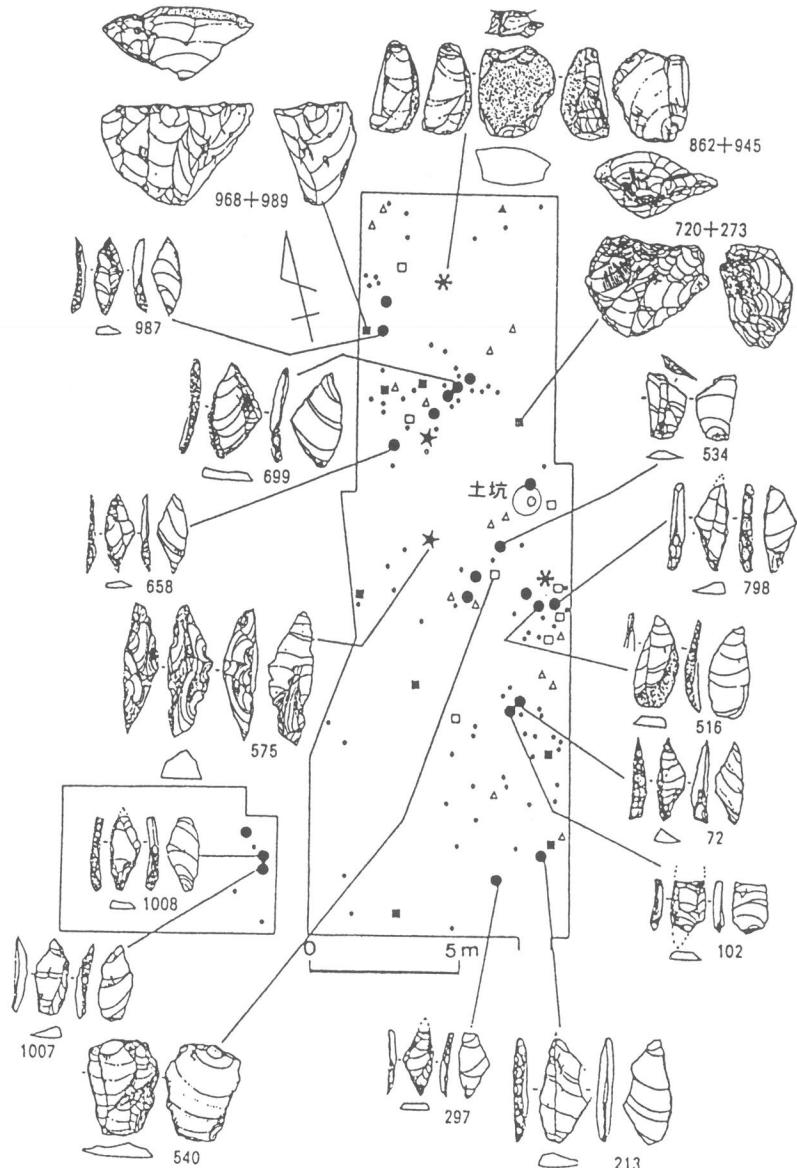
第122図 椎ノ木山遺跡
土坑位置図(★印)



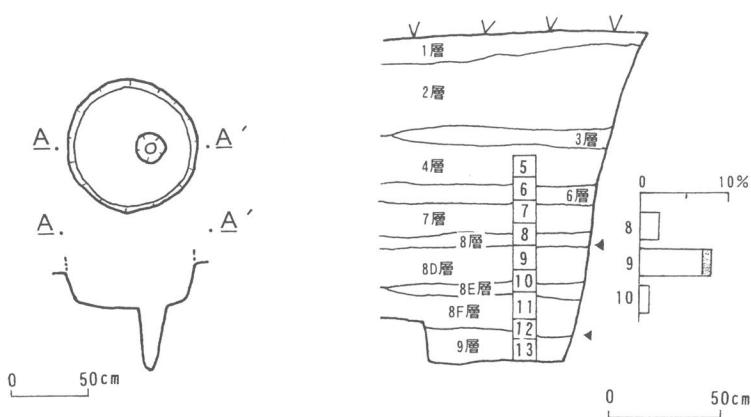
第124図 牟田の原遺跡と
周辺の地形
(1/25,000 紐差)



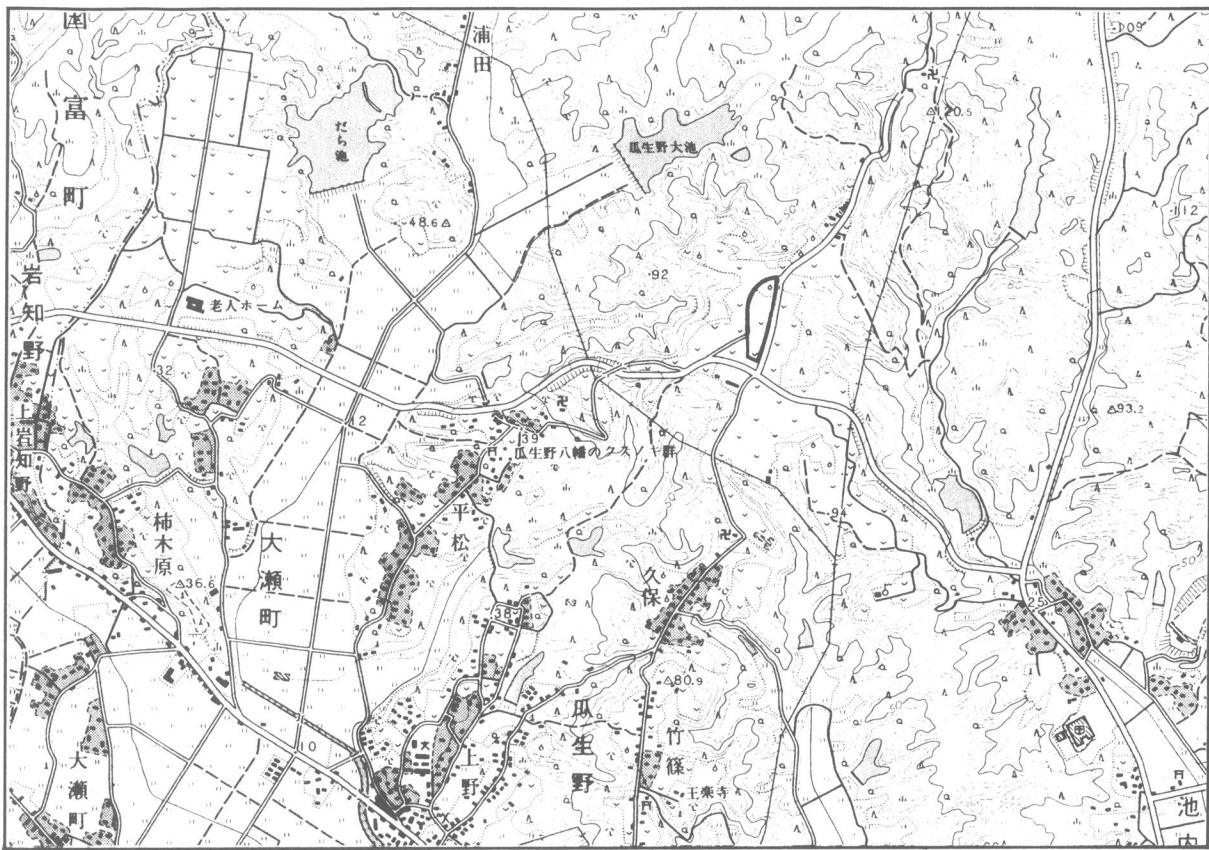
第125図 牟田の原遺跡
土坑位置図 (●印: 土坑)



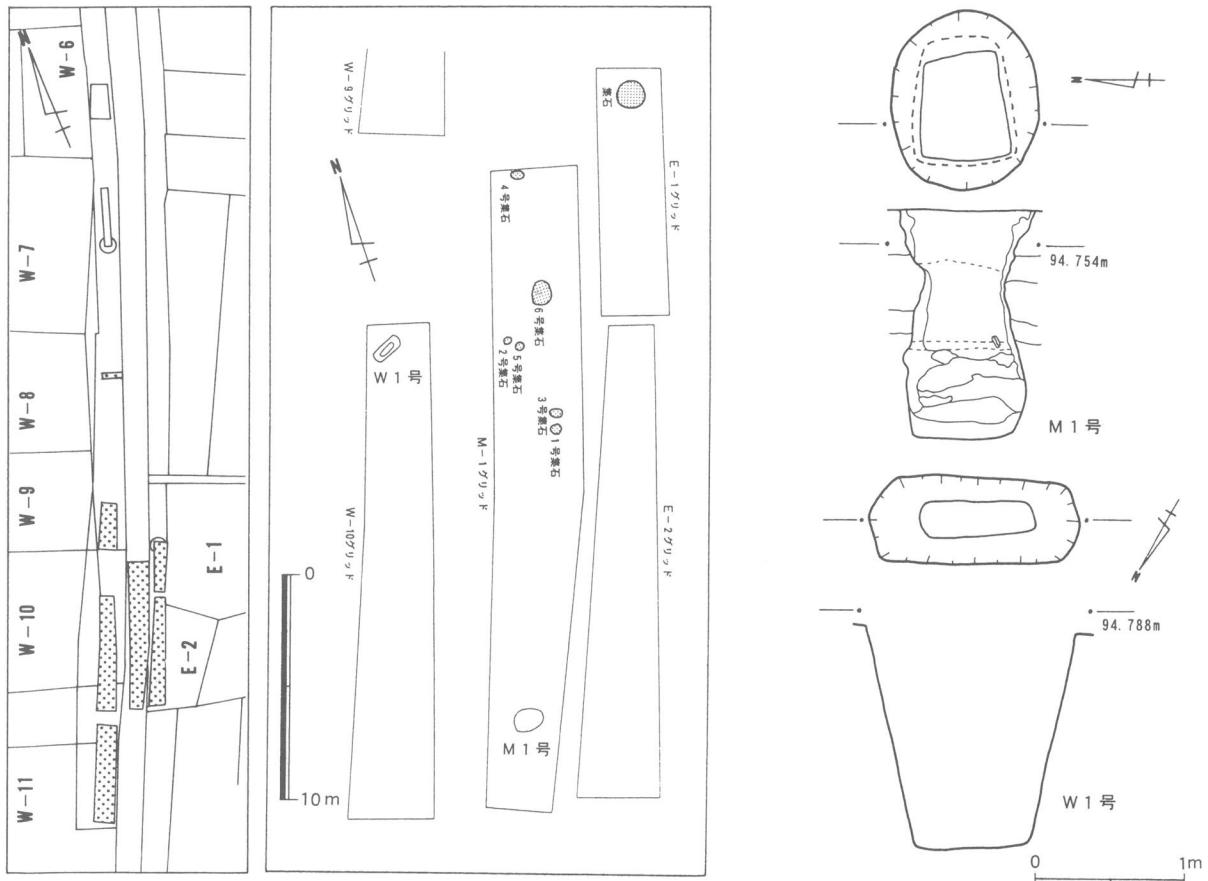
第126図 牟田の原遺跡第Ⅱ文化層の遺物分布図（石器縮尺1/3）と土坑の位置



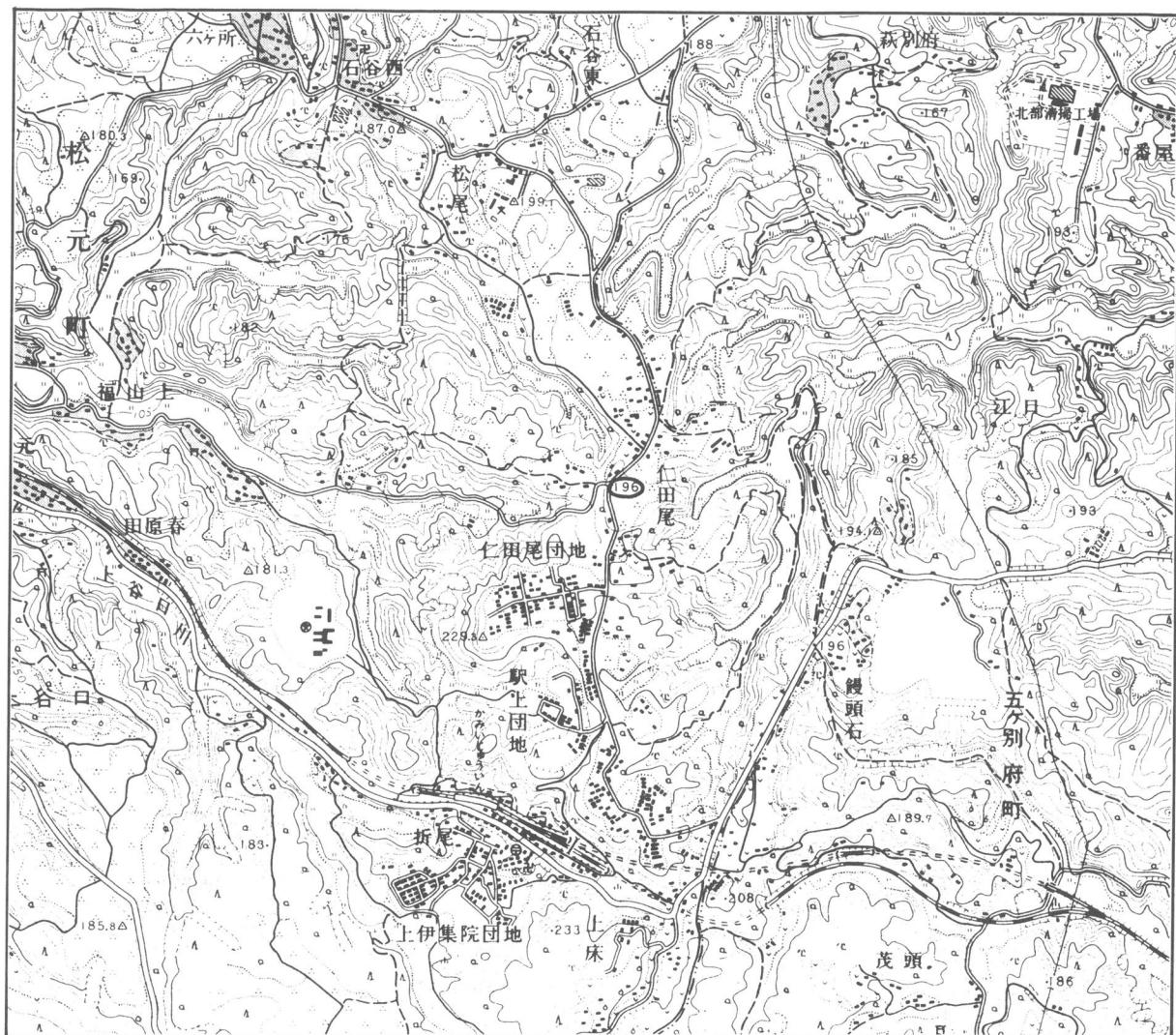
第127図 牟田の原遺跡土坑実測図 左 (1/50) および土層断面図 (試料番号), 火山ガラス比



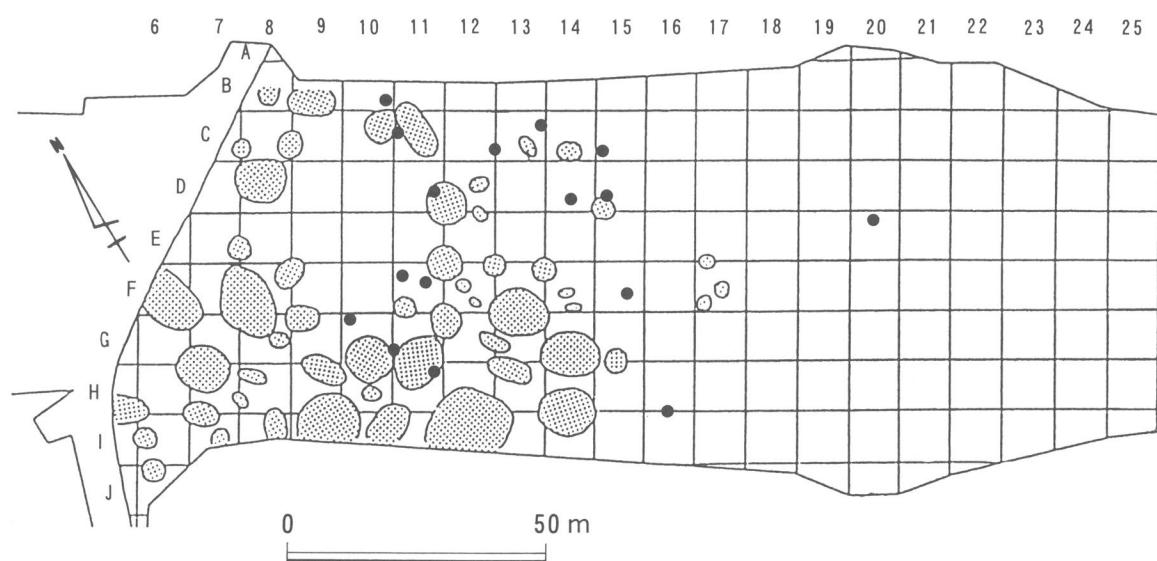
第128図 垂水第1遺跡と周辺の地形 (1/25,000 宮崎北部)



第129図 垂水第1遺跡土坑位置図および実測図 (1/50)



第130図 仁田尾遺跡と周辺の地形 (1/25,000 伊集院)



第131図 仁田尾遺跡土坑配置図（●：土坑，網点：石器ブロック）

土坑の平面形は長方形ないし橢円形で、坑底は平らにしっかり掘られているので、断面は縦、横断面とも底面から開口部までまっすぐ垂直に近く立ち上がるものが多い（第132図）。

坑底に小ピットを有するものが多い。ピットは直径10～15cm、深さ40cm程度の小穴が2～4個1列に並ぶものと、直径3cm、深さ15cm程度の小穴5～10個が数列並ぶものとがある。後者は細い杭を直接打ち込んだもの、前者は小穴中に細い杭複数を埋め込んだものであることが明らかになったという。土坑の大きさを実測図の示された例で示しておこう。

第2号土坑：長さ180cm、幅100cm、深さ140cm。第3号土坑：長さ140cm、幅90cm、深さ90cm。

上記の値がほぼ平均的なものである。

土坑の長軸にも南北方向を基調とする一定の傾向が窺えるような印象がある。発掘時の所見としては、土坑群に明らかな単位、配列性などが認められるということはなさそうである。

当遺跡で薩摩火山灰層（約11,000年前）の下位VIIa／VIIb上半で細石刃石器群のブロック45ヵ所が検出されている。土坑は時期的には、これらの石器群にともなったものである。土坑の最上部を薩摩火山灰が覆い、土坑の構築時期を層位的に正確に把握出来る例としては、三島地域以外では非常に貴重な例である。

石器群の一部に磨製石斧、石鎌、無文土器と共に伴するものがあるといい、所属時期が岩宿時代か縄文草創期なのかといった、時期区分の微妙な問題がある。いずれにしろ詳細未報告資料であり、正式報告の刊行を楽しみにまちたい。

(17) 鹿児島県大久保遺跡

県北熊本県境、上台地内に位置する。有名な上場遺跡とは1kmの距離にある。一帯は高原中の小盆地状を呈する。中央に低地がひろがり、これに向かって丘や台地がせりだしてくるが、遺跡は北から延びるゆるやかな丘陵の中軸線上に位置する。丘の西・東側には南側の低地につづく浅い谷がまわりこんできている。標高500m。

土坑の平面形は橢円形で、坑底には小ピットが6個ある。長さ210cm、幅70cm、深さ90cm。細石刃石器群と共に伴するものと理解されているようである。未報告。詳細不明。

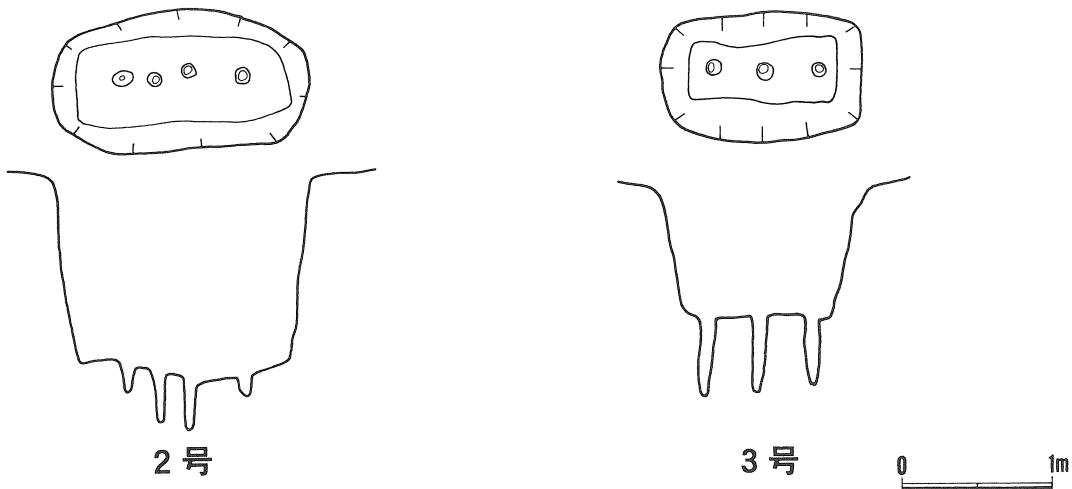
(18) 鹿児島県鹿村ヶ迫

鹿児島県中央部、薩摩郡入来町内所在。標高110m。北向きの斜面に近い台地の端で2基の土坑が検出されたという。

平面形は橢円形と長方形で坑底に小穴が認められる。長さ約100cm、幅約80cm、深さ約70cm。

細石刃石器群約500点が出土している。未報告。詳細不明。

（鈴木忠司）



第132図 仁田尾遺跡土坑実測図 (1/50)

註

(1) 本土坑は、稻田孝司氏の分類による坑底に一つもつ小穴 1 型に属する。中国地方や九州地方の陥穴状土坑の研究によれば、プラン、規模、坑底小穴の数・深さ等の点で、本例に非常によく似た例が、ごく一般的に検出されているようである。そしてその年代は縄文早期にまで逆上る可能性があるという。本例の現存深度から予想される掘り込み面、堆積と文化層との関連から見ると、掘り込みの時期（層準）は、縄文時代早期以降に下る可能性は十分にあろう。このような点から判断してこれは縄文時代以降の所産であると考えておきたい。

稻田孝司 1993 「西日本の縄文時代落とし穴彌」(『論苑 考古学』、天山舎)。

高橋信武 1993 「九州の陥し穴の変換」(『先史学論究』、熊本大学)。

富永直樹・萩原裕房編 1989 『安武地区遺跡群 2』(久留米市教育委員会)。

(2) 脱稿後、細石刃文化期に属する可能性が高い旨、日高広人氏のご教示をえた。

岩宿時代陥穴状遺構関係文献目録

1. 佐川正敏 1986 「旧石器時代の遺構」(『東北大学埋蔵文化財調査年報』2)。
2. 手塚 均・小川 出 1986 「支倉遺跡」(『東北横断自動車道遺跡調査報告書』I、宮城県教育委員会)。
3. 小川 出・藤沼邦彦他 1986 『中峯遺跡発掘調査報告書』(宮城県教育委員会、1986)。
4. 岩崎泰一編 1989 『勝保沢中ノ山』(群馬県教育委員会)。
5. 浜野美代子・川口 潤 1989 『大山遺跡』(『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告集』第84集)。
6. 宮 重行・池田大助他 1981 『木の根』(千葉県埋文センター、1981)。
7. J. E. キダー・小山修三他 1971 「国際基督教大学構内Loc.15の先土器文化」(『人類学雑誌』第80巻第1号)。
8. 板橋区四葉遺跡調査会 1994 『四葉遺跡 平成6年度年報』。
山村貴輝 「東部台地発見の土坑」(『板橋区史』1巻2、資料編印刷中)。
9. 伊藤 健 1995 「菅原神社台地上遺跡」(『第2回石器文化研究交流会発表要旨』)。
10. 小川 望・角張淳一 1993 「鈴木遺跡農林中央金庫地点検出の旧石器時代の土坑」(『東京考古学』11)。
- 小川 望編 1993 『鈴木遺跡 農林中央金庫研修所北側道路地点』(『小平市埋蔵文化財発掘調査

報告書』第21集)。

11. 稲村 繁・佐藤明生他編 1990 『長井台地遺跡群』(横須賀市教委)。
12. 上村佳典編 1987 『椎ノ木山遺跡 第2地点』(北九州市教育文化事業団)。
13. 萩原博文・加藤有重他 1990 『大戸遺跡Ⅱ 牟田の原遺跡Ⅱ 津吉遺跡群Ⅱ 平戸城跡Ⅱ』(『平戸市の文化財』31、平戸市教育委員会)。
14. 萩原博文 1996 「平戸の旧石器時代」(『平戸市史 自然・考古編』、平戸市史編さん委員会)。
15. 日高広人 1994 『垂水第1遺跡』(宮崎市教育委員会)。
16. 日高広人 1995 「陥し穴(宮崎県)」(『旧石器から縄へ』、鹿児島県考古学会・宮崎県考古学会)。
17. 鹿児島県立埋蔵文化財センター 1994 『巻頭図版 鹿児島県松元町仁田尾遺跡』(『旧石器考古学』49)。
18. 宮田栄二 1994 「仁田尾遺跡」(『日本の夜明け 鹿児島の縄文文化』、考古学フォーラム・イン鹿児島実行委員会)。
19. 宮田栄二 1995 「陥し穴(鹿児島県)」(『旧石器から縄文へ』、鹿児島県考古学会・宮崎県考古学会)。
20. 鹿児島県立埋蔵文化財センター 1995 『仁田尾遺跡(現説資料)』(鹿児島県立埋蔵文化財センター)。
21. 宮田栄二 1996 『鹿児島県日置郡松元町仁田尾遺跡』(『日本考古学年報』47)。
22. 毎日新聞鹿児島版 1994年12月9日記事。
23. 藤井法博 1995 「鹿村ヶ迫遺跡」(『埋文だより』8、鹿児島県立埋蔵文化財センター)。
24. 加藤学園考古学研究所 1994 『久根ヶ崎遺跡』(葦山町教育委員会)。
25. 前嶋秀張・鈴木敏中 1998 『初音ヶ原遺跡群』Ⅲ(三島市教育委員会)。
26. 前嶋秀張 1989 「初音ヶ原遺跡出土の土坑について」(『静岡県考古学研究』20、静岡県考古学会)。
27. 三島市教育委員会 「陥穴状遺構の発見」(『静岡の原像を探る』、静岡県教育委員会、1989)。
28. 小野千賀子・伊林修一他 1995 『下原遺跡Ⅰ』(静岡県埋蔵文化財研究所)。
29. 笹原芳郎 1994 『焼場遺跡A地点』(静岡県埋蔵文化財研究所)。
30. 横山秀昭 1996 『加茂ノ洞B遺跡』(静岡県埋蔵文化財研究所)。
31. 笹原千賀子 1997 『八田原遺跡』(静岡県埋蔵文化財研究所)。
32. 石川治夫 1982 「子ノ神」(『子ノ神・大谷津・山崎Ⅱ・丸尾Ⅱ』、沼津市教育委員会)。
33. 池谷信之・殿岡宗浩他 1996 『柏葉尾遺跡発掘調査報告書』(沼津市教育委員会)。
34. 鈴木忠司編 1980 『寺谷遺跡』(磐田市教育委員会)。
35. 佐口節司・室内美香編 1995 『平成6年度梵天古墳群・勾坂中下4遺跡発掘調査報告書』(磐田市教育委員会)。
36. 富樫孝志 1997 「(図版解説) 静岡県磐田郡豊田町高見丘Ⅲ・Ⅳ遺跡の旧石器時代土坑」(『古代文化』第49巻第4号、古代学協会)。
37. 山下秀樹編 1985 『広野北遺跡』(静岡県豊田町教育委員会)。

遺跡との対応関係は表22参照